

環境保全行政の概要

平成26年版

川口市

目 次

第1章 総 説

第1節	川口市の概要	1
1	位置	1
2	人口・世帯数の推移	1
3	土地利用	2
4	行政機構および事務分掌	3
5	行政の事業費内訳	4
6	分析センター	4
第2節	環境問題の展開	5
1	公害から都市生活型の環境問題へ	5
2	地球環境問題	5
3	環境問題への取り組み	5
第3節	川口市環境基本計画	7
1	計画策定の経緯	7
2	位置づけ	8
3	推進体制	9
4	施策の体系	10

第2章 環境の現況と対策

第1節	大気環境	11
1	現況	12
(1)	一般環境大気測定局	12
(2)	自動車排出ガス測定局	18
(3)	微小粒子状物質（PM _{2.5} ）成分分析	22
2	対策	23
(1)	工場・事業場	23
(2)	自動車排出ガス	25
(3)	光化学スモッグ被害の防止	26
(4)	微小粒子状物質（PM _{2.5} ）による被害の防止	27
第2節	有害化学物質	28
1	現況	28
(1)	有害大気汚染物質	28
(2)	ダイオキシン類	29
2	対策	30
(1)	工場・事業場	30
(2)	野外焼却	31
3	化学物質の適正管理	32
(1)	法・条例に係る届出状況	32
(2)	排出量・移動量・取扱量	32
(3)	取扱（排出）事業者に対する行政指導	34

第3節	水環境	35
1	現況	36
	(1) 各河川の水質	36
	(2) 河川底質	38
	(3) 地下水	39
2	対策	40
	(1) 工場・事業場	40
	(2) 生活排水	42
	(3) 公共用水域の異常水質	42
第4節	土壌汚染・地盤沈下	43
1	土壌汚染	43
	(1) 概況	43
	(2) 調査報告	44
	(3) 現況	44
2	地盤沈下	45
第5節	騒音・振動	46
1	自動車交通	46
2	工場・事業場	49
3	特定建設作業	51
4	深夜営業	51
第6節	悪臭	52
第7節	公害苦情の現況	53
1	種類別発生状況	53
2	発生源別発生状況	54
3	用途地域別発生状況	55
第8節	その他	56
1	協議会関係	56
	(1) 綾瀬川浄化対策協議会	56
	(2) 武蔵野線公害対策連絡協議会	56
2	あき地の環境保全	56

資料編

I	行政年表	57
II	関係条例等	60
1	川口市環境基本条例	60
2	川口市環境審議会条例	63
3	川口市あき地の環境保全に関する条例	65
4	川口市あき地の環境保全に関する条例施行規則	66
5	川口市浄化槽法施行細則	68
6	川口市浄化槽設置整備事業補助金交付要綱	69
III	用語解説	72

「*（アスタリスク）」が付いている語句の解説です。

第1章

総説

第1節 川口市の概要

1 位置

川口市は埼玉県南端に位置し、荒川を隔てて東京都に接し、また県内では戸田、蕨、さいたま、越谷、草加の各市と接しています。面積は61.97km²であり、市の大部分が、都心から10～20km圏内に含まれます。

川口市の位置



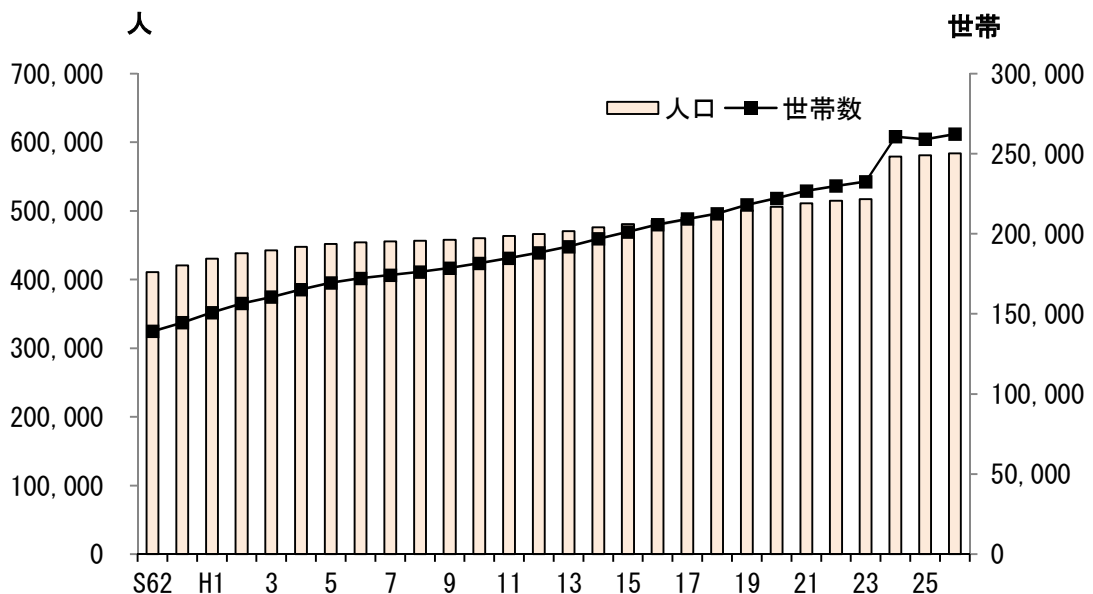
市役所の所在地

住所	川口市青木2丁目1番1号
経度	139度43分27秒
緯度	35度48分28秒

2 人口・世帯数の推移

平成23年10月11日の鳩ヶ谷市との合併を経て、平成26年4月1日現在、本市の人口は585,503人（住民基本台帳上の日本人と外国人の数）であり、県内では、さいたま市（政令指定都市）に次ぐ人口規模の大きな都市です。

人口・世帯数の推移

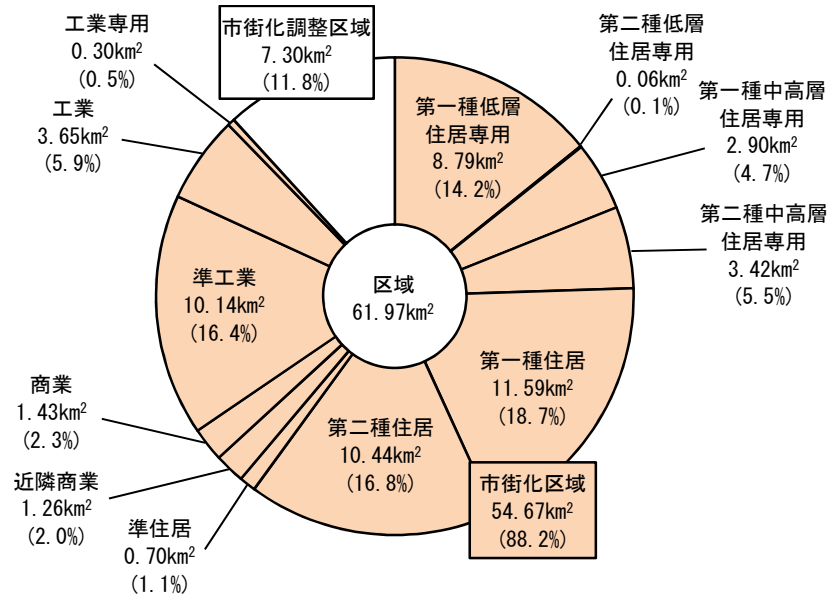


3 土地利用

市制施行時（昭和8年4月1日）の市域は、19.40km²でした。その後、周辺自治体との合併・分離を経て、現在の市域は61.97km²となりました。

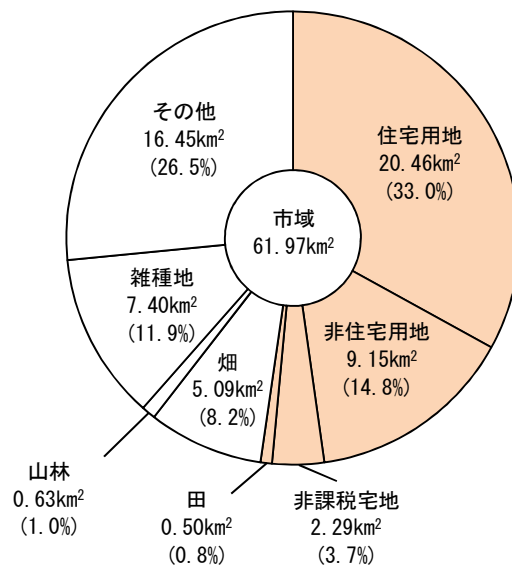
川口都市計画区域について用途地域別に見ますと、54.67km²は市街化区域、7.30km²は市街化調整区域となっています。また、地目別に見ますと約5割が宅地です。

用途地域別面積
(川口都市計画区域)



- ※ 面積 (km²) は四捨五入して表記しているため、合計が一致しないことがある
- ※ 割合 (%) は四捨五入して表記しているため、合計が100%にならないことがある

地目別面積

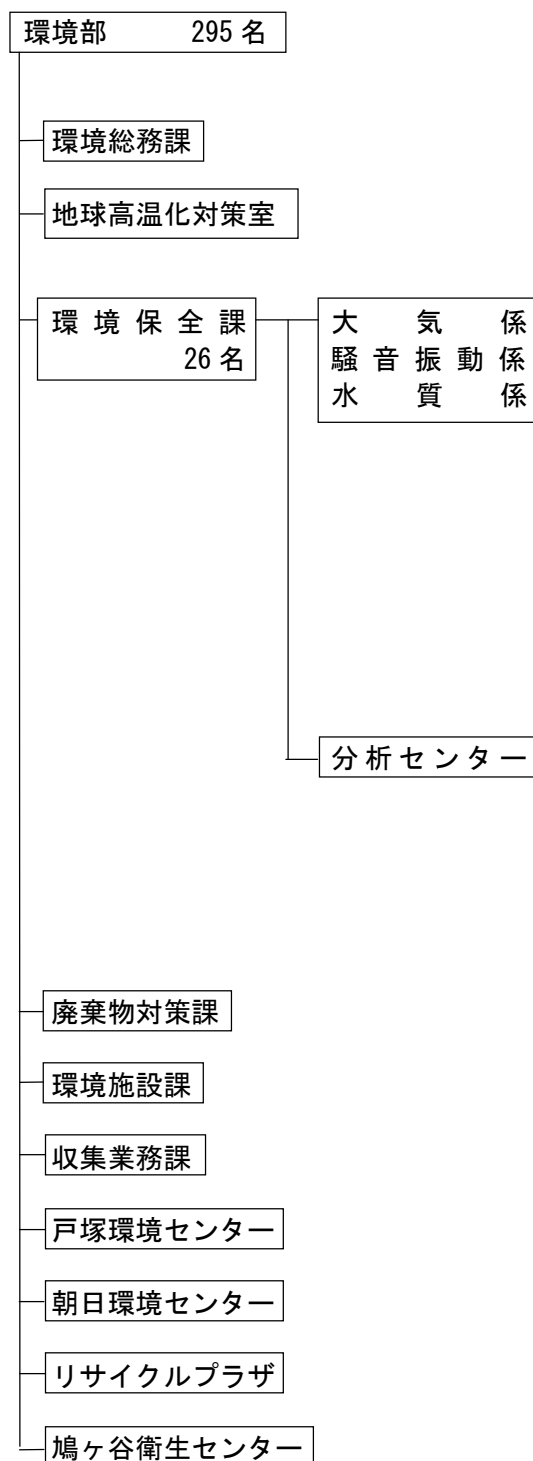


- ※ 地目別面積のグラフは、平成24年1月1日現在データに基づき作成
- ※ 割合 (%) は四捨五入して表記しているため、合計が100%にならないことがある

4 行政機構および事務分掌

(平成26年4月1日現在)

行政機構



事務分掌

- ・廃棄物*の減量および適正処理に関すること。
- ・環境の保全に関すること。

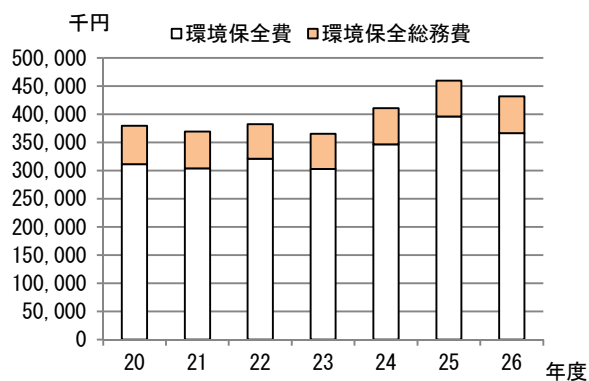
- ・大気汚染*、水質汚濁*、土壌汚染*、騒音*、振動*、地盤沈下*および悪臭*の防止ならびにダイオキシン類*の対策等に関すること。
- ・公害関係法令に基づく届出に関すること。
- ・環境調査に関すること。
- ・浄化槽の届出等に関すること。
- ・あき地の適正管理に関すること。
- ・公害防止資金融資の相談に関すること。

- ・大気汚染物質の常時監視*および調査測定に関すること。
- ・有害大気汚染物質の調査測定に関すること。
- ・騒音および振動の調査測定に関すること。
- ・河川等の常時監視および調査測定に関すること。
- ・工場、事業場等の排水検査に関すること。
- ・土壌、産業廃棄物等の分析測定に関すること。
- ・ダイオキシン類の調査測定に関すること。

5 行政の事業費内訳

本市の平成26年度当初の環境保全関係予算は432,046千円で、歳出科目は環境保全総務費と環境保全費となっています。環境保全総務費は人件費を含む総務関係経費で構成され、環境保全費は各種事業・調査・分析等の経費で構成されています。

当初予算額の推移



6 分析センター

本センターでは、「大気汚染防止法*」、「水質汚濁防止法*」、「ダイオキシン類対策特別措置法*」、「騒音規制法」に基づく常時監視*に加え、各部局の依頼に基づく調査、分析を行っています。

所在地	埼玉県川口市大字石神854-1 (石神配水場内)
建物概要	鉄筋・鉄骨コンクリート造 3階建て 延床面積477.7m ²
調査分析実績	2,153検体 13,125項目 (平成25年度)

第2節 環境問題の展開

1 公害から都市生活型の環境問題へ

高度経済成長期に工場や事業場が発生源とされた産業型公害は、大気汚染*、水質汚濁*、騒音*、振動*、悪臭*、地盤沈下*、土壌汚染*の「典型7公害」と呼ばれる、さまざまな公害問題を起こしてきましたが、現在は、法令の整備や公害防止技術の向上により大幅に改善しています。その反面、自動車排出ガスによる大気汚染、生活排水*による水質汚濁や近隣の騒音問題等、一人ひとりの生活に起因する都市生活型の環境問題や地球高温化*をはじめとする地球規模の環境問題が広がりを見せ、気候変動、食料生産、生態系の破壊や人々の健康・生活等にさまざまな影響が現れつつあります。

2 地球環境問題

地球環境問題は、発生源や被害・影響が一地域にとどまらず、国境を越えるような地球規模の環境問題を指し、主なものとして、地球高温化*・酸性雨・熱帯林の破壊・オゾン層*の破壊・海洋汚染*・生物多様性の減退・生態系の破壊等があります。これらは、化石燃料*の燃焼で発生した二酸化炭素・窒素酸化物*・硫黄酸化物等の排出、自然への影響を無視した開発や農薬・フロン等の化学物質の漏出等に起因しています。

3 環境問題への取り組み

地球高温化*やオゾン層*の破壊等の地球環境問題は広範囲に影響が及ぶため、従来の産業型公害対策のように法令による規制では十分な対応ができるとは言えません。地球環境を保全していくには、広域的な対策から、一人ひとりのライフスタイル*や事業者のビジネススタイルの転換といった取り組みまで、幅広い分野において、環境問題を個々の課題ごとではなく総合的に捉え、計画的に施策を講じることが必要になってきました。

わが国では、平成5年11月に「環境基本法*」が制定され、同法に基づき平成6年12月に「第一次環境基本計画*」が閣議決定され、現在では、「第四次環境基本計画」が定められ、「安全」を前提として「低炭素」・「循環」・「自然共生」の各分野を統合的に達成する持続可能な社会を目指すとしています。

本市では、市民・事業者・市が適正な役割分担と協働のもとに、今ある環境を守り育てていくことを目的として、平成11年4月に「川口市環境基本条例*」を施行し、同条例に基づき、平成13年3月に「川口市環境基本計画」を策定しました。

その後、社会の変化や計画期間の終了に伴い改訂を重ね、現在では、「第2次川口市環境基本計画」に基づき、環境の保全および創造に関する施策の推進に向けて、取り組みを行っています。

また、地球環境問題の中でも、地球高温化対策（温室効果ガス*の排出抑制）は重要なものとして位置づけられ、「地球温暖化対策の推進に関する法律」に基づく

計画として「川口市地球高温化対策実行計画（区域施策編）」、「同（事務事業編）」をそれぞれ策定しています。

本市は、首都圏にあって埼玉県内でも特に都市化の進んだ地域でありながら、河川や用水路が市内を流れ、屋敷林や斜面林が点在し、樹林地など自然の面影が残されているところもあります。この恵まれた自然環境の保全や快適な都市環境の創造は、現在および将来の世代のための重要な課題です。エネルギー利用や環境問題を地球規模で考え、これまで以上に、市民・事業者・市が協働して地域の環境問題に取り組んでいかななくてはなりません。

第3節 川口市環境基本計画

1 計画策定の経緯

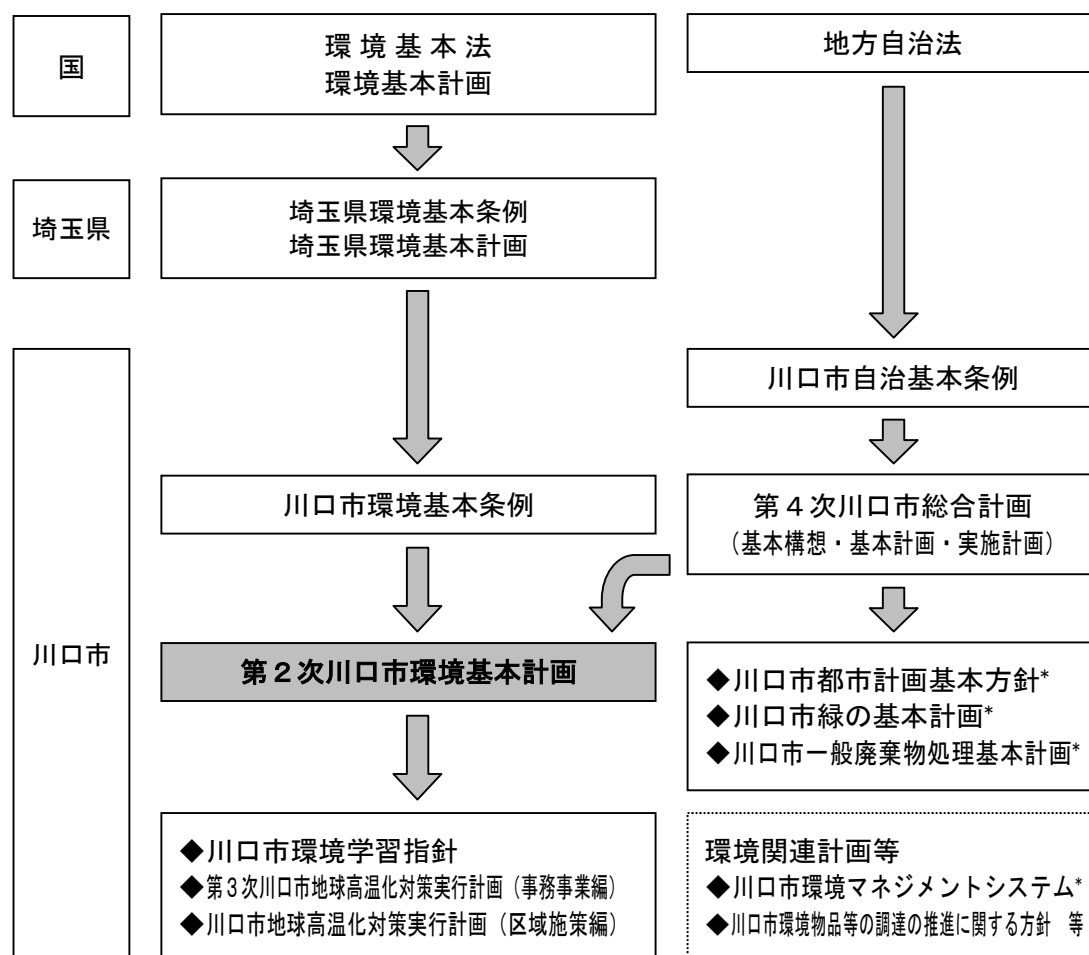
「川口市環境基本計画（第1次）」は、「川口市環境基本条例*」に掲げられた基本理念を実現するため、「第3次川口市総合計画*」をはじめとする各種の計画と整合を図り、また、環境の保全および創造に関して各種の行政施策を横断的に対応させる等、良好な環境づくりを総合的に進めていくための計画として、平成13年3月に策定されました。

第1次計画の策定以降、本市では、各種の環境保全施策を推進してきましたが、地球高温化*をはじめとする地球環境問題や、経済・産業から生活様式までにいたるグローバル化の影響、ヒートアイランド現象の深刻化など、本市の環境行政を取り巻く状況が大きく変化し、この変化に対応するため、平成20年3月に計画の改訂を行いました。

第1次計画の改訂以降、一層の温室効果ガス*の削減や生物多様性の保全と持続可能な利用に関する取り組みが進む一方で、地球環境保全のための地域の対応がますます求められるほか、まちづくりの基本的な方向性を示す本市の最上位計画である「第4次川口市総合計画」が策定されたことから、より総合的かつ計画的に環境保全に取り組むため、「第2次川口市環境基本計画」を平成23年3月に策定しました。

2 位置づけ

「第2次川口市環境基本計画」は、「第4次川口市総合計画*」に定められた将来都市像「緑 うるおい 人 生き生き 新産業文化都市 川口」を実現するための施策の基本的な方向性を環境面から補完し、同総合計画の基本理念の一つである「環境との共生」を具体化するための計画であり、市民・事業者・市が共に環境に配慮した行動に取り組むための指針となるほか、国や県の環境政策と連携を図り、各種の個別計画や個別施策に対して環境への配慮を促すものです。



3 推進体制

計画を円滑に推進するため、市民・事業者・市の協働のもと、各々の積極的かつ自主的な行動によって、本市の望ましい将来の環境像「郷土として愛着のもてる緑豊かな環境共生都市*」の実現に向けた推進体制を整備しています。

(1) 川口市環境審議会

環境の保全に関する市長の諮問に応じて専門的な審議を行い、答申や助言を行うとともに、計画の施策・見直しについて審議を行います。

(2) 川口市環境基本計画推進委員会

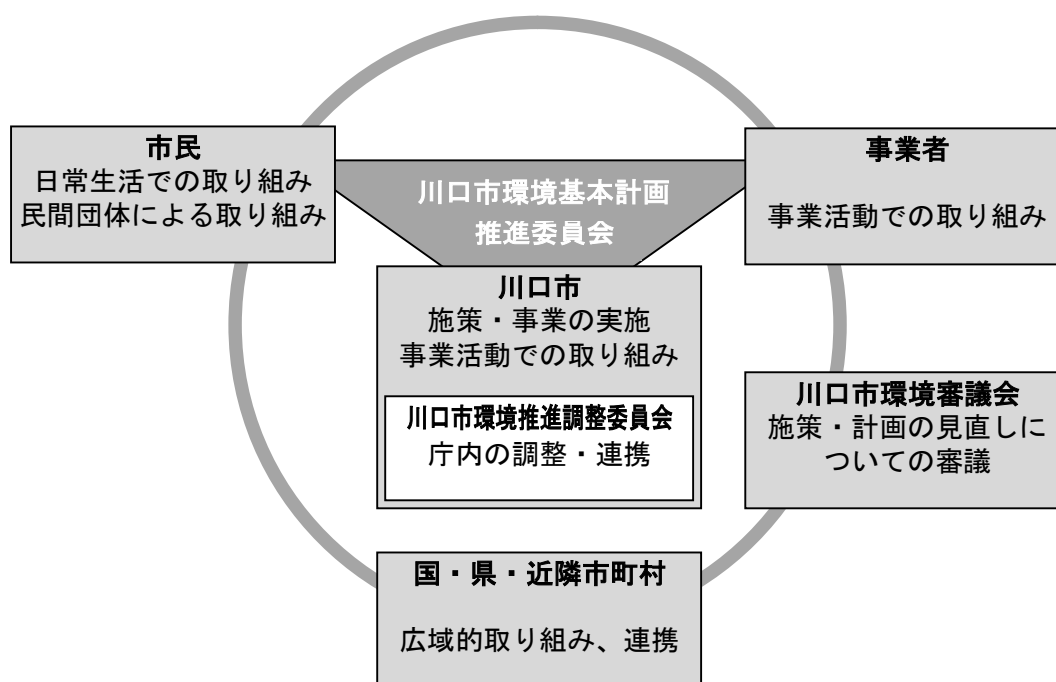
市民・事業者・市の協働による施策の実施、目標の実現に取り組むため、「川口市環境基本計画推進委員会」を計画の推進母体として位置づけ、推進方策や進捗管理等に対する意見交換や市への提言を行います。

(3) 川口市環境推進調整委員会

計画を推進するための庁内組織として、「川口市環境推進調整委員会」を設置し、関係部局間での施策の調整や連携を図ります。

(4) 広域的な連携

計画の推進にあたり、地球高温化*、大気環境、水環境や自然環境など、広域的に取り組むことが必要な課題について、国や県、近隣市町村との連携を図ります。



4 施策の体系

施策の柱		個別目標	施策
I 環 境 の 保 全 ・ 創 造	1 地球環境に配慮した暮らしを 実践するまち	1 地球環境にやさしい、低炭素なまちに します	1-1 環境への負荷の低減 1-2 地球高温暖化の防止
	2 健康で安心して暮らせるまち	2 空気のきれいな、落ち着いたあるまち にします	2-1 発生源に対する規制および指導 2-2 大気汚染防止対策 2-3 環境監視の推進 2-4 自動車交通量の低減化および交通流の円滑化 2-5 エコドライブ*の普及と促進
		3 きれいな水の流れるまちにします	3-1 発生源に対する規制および指導 3-2 総合的な水質改善対策の推進 3-3 環境監視の推進 3-4 水質汚濁防止活動の普及啓発
		4 有害化学物質による汚染のないまちに します	4-1 発生源に対する規制および指導 4-2 有害化学物質による汚染防止対策 4-3 環境監視の推進 4-4 有害化学物質に関する情報の収集および提供
	3 豊かな自然とともに快適に暮 らせるまち	5 人と自然が共生するまちにします	5-1 樹林地の保全 5-2 水辺地の保全 5-3 農地等の保全と活用 5-4 身近な緑の保全と創出
		6 歴史や文化の息づく、美しく魅力のある まちにします	6-1 文化財の保護・保存と活用 6-2 産業文化、伝統技術の保存と継承 6-3 美しい景観とまちづくり 6-4 まち美化の推進
	4 限りある資源を有効に利用し 循環型社会を形成するまち	7 ごみの発生・排出抑制、再使用、再生 利用をすすめます	7-1 ごみの発生・排出抑制（リデュース）の推進 7-2 再使用（リユース）の推進 7-3 再生利用（リサイクル）の推進 7-4 普及啓発事業の推進および処理施設の整備
	II 連携・協働による取り組みの推進	8 協働して環境共生都市をつくります	8-1 さまざまな主体との協働の推進 8-2 コミュニティ活動の支援 8-3 自主的な市民活動の支援 8-4 協働推進の仕組みづくり
	III 環境学習の推進	9 主体的に環境学習をすすめます	9-1 環境に目を向ける人づくり 9-2 環境に出会う機会づくり 9-3 環境を学ぶ場所づくり 9-4 環境への理解を広める情報提供と普及啓発

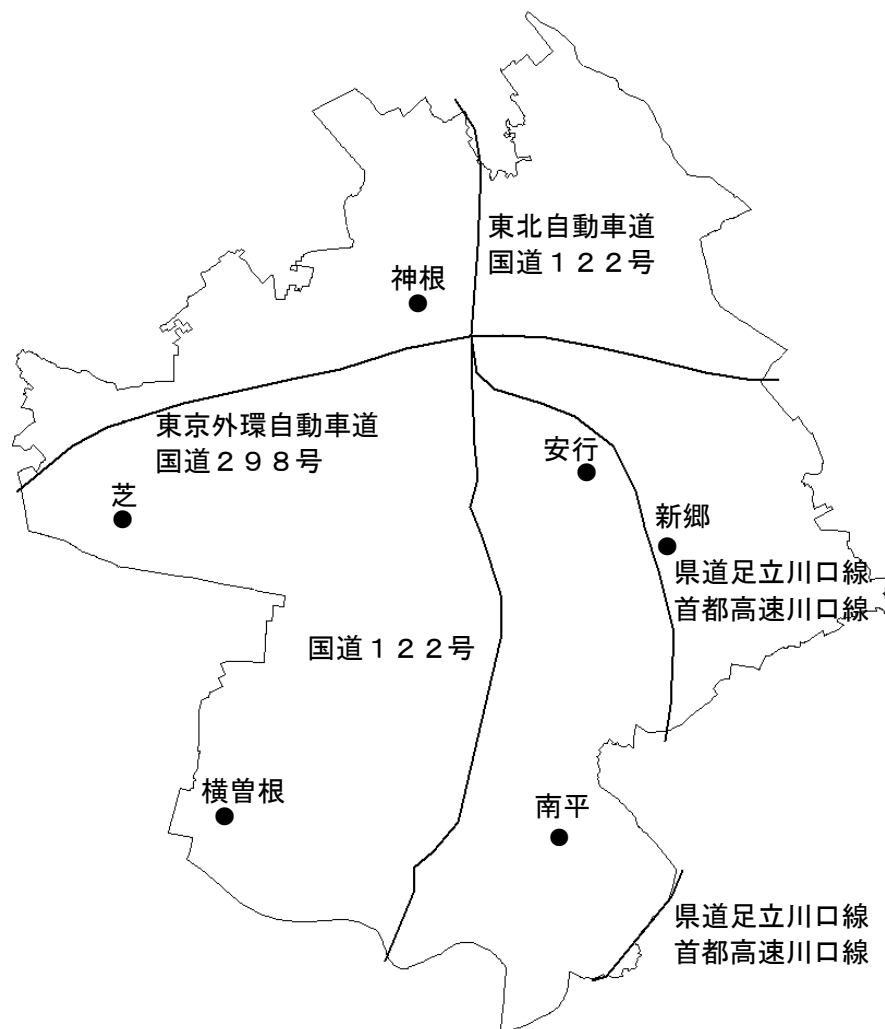
第2章

環境の現況と対策

第1節 大気環境

市内における大気汚染*の状況を把握するため、本市では一般環境大気測定局*4局(以下、一般局)、自動車排出ガス測定局*2局(以下、自排局)の合計6局で「大気汚染防止法*」に基づき、大気汚染の常時監視*を実施しています。

大気環境の測定地点図



大気汚染監視測定体制

測定項目		窒素酸化物	浮遊粒子状物質	光化学オキシダント	二酸化硫黄	一酸化炭素	炭化水素	微小粒子状物質	風向・風速	温度・湿度
一般局	横 曽 根	○	○						○	
	南 平	○	○	○	○		○	○	○	○
	新 郷	○	○	○					○	
	芝	○	○	○				○		
自排局	安 行	○	○				○		○	
	神 根	○	○			○		○	○	

1 現況

(1) 一般環境大気測定局

ア 二酸化窒素

二酸化窒素は、窒素酸化物*の一つで、人の呼吸器系への悪影響のほか、酸性雨、光化学オキシダントの原因物質でもあります。窒素酸化物はものが燃えるときに発生し、主な発生源は工場・事業場のばい煙*、自動車の排出ガスです。窒素酸化物の多くは一酸化窒素ですが、大気中で紫外線により酸素やオゾンと反応して二酸化窒素となります。

平成25年度は、すべての測定局で環境基準*を達成しました。また、近年は環境基準を連続して達成しています。

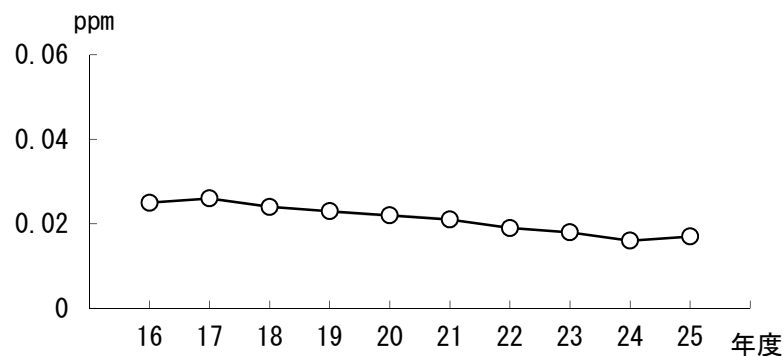
※ 以下の環境基準達成状況の表において、「○」は達成、「×」は非達成を示す

二酸化窒素の環境基準達成状況

測定局	年度	21	22	23	24	25
	評価方法	長期的評価				
中央		○	○	—	—	—
横曽根		○	○	○	○	○
南平		○	○	○	○	○
新郷		○	○	○	○	○
芝		○	○	○	○	○

※ 中央測定局は平成22年度まで測定

二酸化窒素年平均値の経年変化



イ 浮遊粒子状物質

浮遊粒子状物質とは、大気中に浮遊している粒子状物質のうち、粒径 10 μ m 以下のものをいいます。発生源は、工場・事業場のばい煙*、粉じん*、ディーゼル車の黒煙、土ぼこり等多岐にわたっています。浮遊粒子状物質は、呼吸によって体内に入り、肺や気管支等の呼吸器系の器官に悪影響を与えるといわれています。

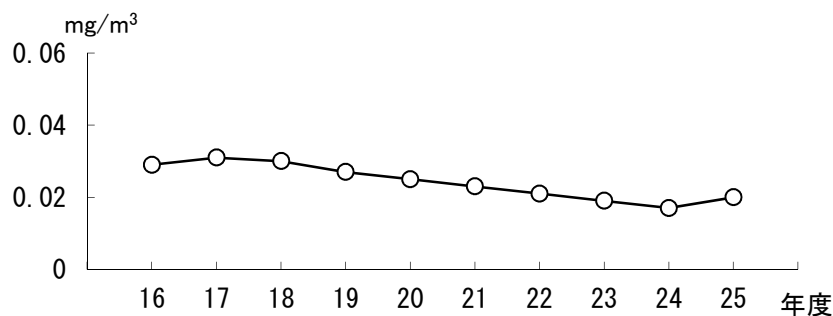
平成 25 年度は、すべての測定局で長期的評価および短期的評価による環境基準*を達成しました。平成 25 年度の浮遊粒子状物質年平均値は前年度に比べ増加したものの、近年はゆるやかな改善傾向を示しています。

浮遊粒子状物質の環境基準達成状況

測定局	2 1		2 2		2 3		2 4		2 5	
	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価
中 央	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—
横 曾 根	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
南 平	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
新 郷	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
芝	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※ 中央測定局は平成 22 年度まで測定

浮遊粒子状物質年平均値の経年変化



ウ 光化学オキシダント

光化学オキシダントとは、窒素酸化物*や炭化水素*類等の物質が、紫外線の働きで化学反応をおこすことにより生成される強酸化性物質の総称で、その主なものはオゾンとされています。

光化学オキシダントによって大気が汚染される状態が光化学スモッグと呼ばれ、風が弱く、日差しの強い夏季を中心に発生するので、気温が高くよく晴れた日の多い年は、光化学スモッグ注意報の発令回数も多い傾向にあります。光化学スモッグは、目や呼吸器等を刺激したり、植物の葉を枯らす等の被害を起こしたりします。

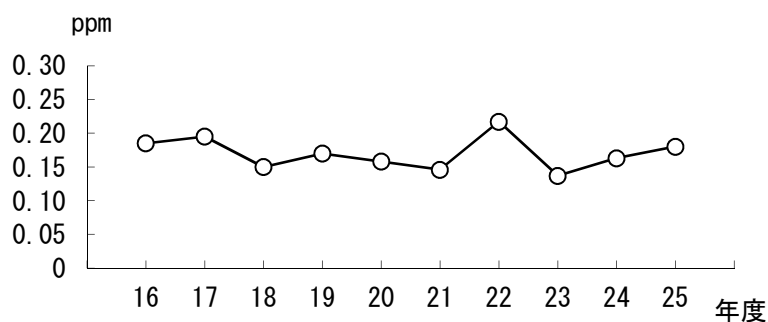
全国的に、ほとんどの測定局で環境基準*を達成しない状況が継続しています。本市でも、平成25年度はすべての測定局で環境基準を達成しませんでした。

光化学オキシダントの環境基準達成状況

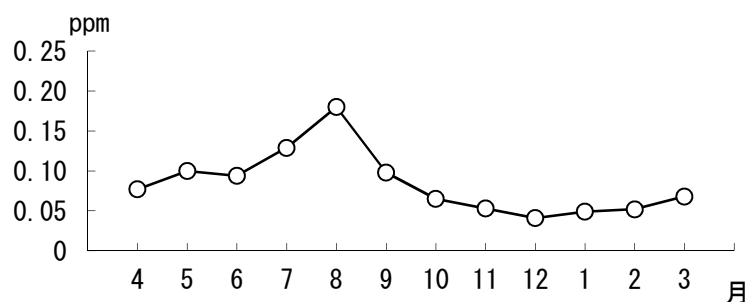
測定局	年度	21	22	23	24	25
	評価方法	短期的評価				
中央		×	×	—	—	—
横曽根		×	×	—	—	—
南平		×	×	×	×	×
新郷		×	×	×	×	×
芝		×	×	×	×	×

※ 中央測定局、横曽根測定局は平成22年度まで測定

光化学オキシダント年最高値の経年変化



平成25年度 光化学オキシダント 月最高値の経月変化



エ 二酸化硫黄

二酸化硫黄は、石油、石炭等の硫黄の含まれている物質が燃焼するときに発生します。主な発生源は、事業活動に伴うものですが、一方で火山活動等自然現象によるものもあります。無色の刺激臭のある気体で、ぜんそくや気管支炎等の呼吸器系疾患を引き起こすほか、酸性雨の原因物質でもあります。

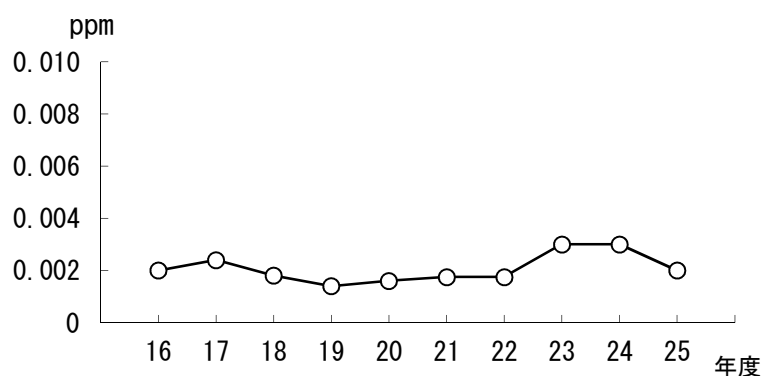
平成25年度は、長期的評価および短期的評価による環境基準*を達成しました。また、近年は環境基準を連続して達成しています。

二酸化硫黄の環境基準達成状況

測定局	21		22		23		24		25	
	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価
横 曽 根	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—
南 平	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
新 郷	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—
芝	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—

※ 平成23年度から南平測定局のみで測定

二酸化硫黄年平均値の経年変化

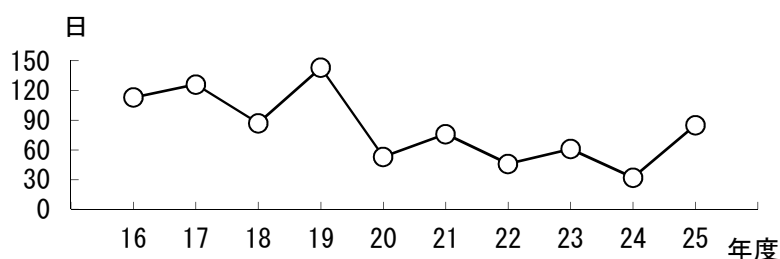


オ 非メタン炭化水素

非メタン炭化水素とは、炭素と水素だけからなる化合物のうち、メタンを除いたものの総称です。有機溶剤を使用する工場や、自動車の排気ガスのほか、多種多様な発生源が存在します。炭化水素*は窒素酸化物*とともに光化学オキシダント生成の主な原因物質とされ、非メタン炭化水素濃度に関して、指針値(0.31ppmC*)が定められています。

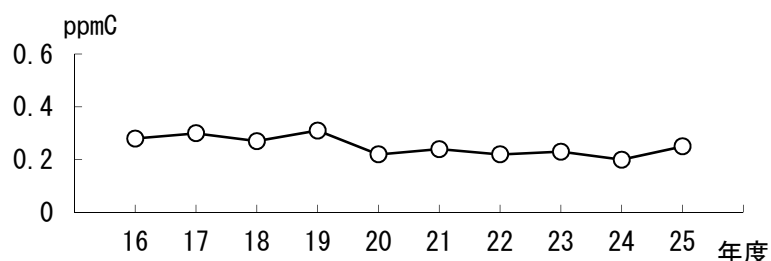
平成20年度以降、午前6時から9時までの3時間平均値の指針値超過日数と濃度は減少傾向にあったものの、平成25年度は過去5年と比較して増加しました。

非メタン炭化水素濃度の午前6時から9時までの
3時間平均値が指針値(0.31ppmC)を超えた日数



※ 平成22年度までは中央測定局、平成23年度からは南平測定局で測定

非メタン炭化水素の午前6時から9時までの
3時間平均値の年平均値の経年変化



※ 平成22年度までは中央測定局、平成23年度からは南平測定局で測定

カ 微小粒子状物質（PM2.5）

微小粒子状物質（PM2.5）*とは、大気中に浮遊している粒子状物質のうち、粒径 2.5 μm 以下の粒子の総称です。呼吸器にさまざまな影響を与えるおそれがあるため、平成 21 年 9 月、新たに環境基準*が定められました。本市の一般局では、平成 25 年 2 月に南平測定局で、平成 25 年 8 月に芝測定局で測定を開始しました。

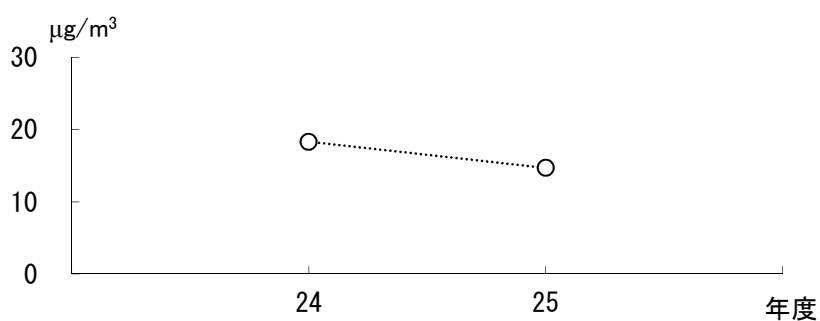
平成 25 年度は、長期基準は環境基準を達成しましたが、短期基準は基準を超過しました。（芝測定局は法令で定める有効測定日数に達していないため、参考値扱い。）

微小粒子状物質の環境基準達成状況

測定局	年度 評価方法	24		25	
		短期基準	長期基準	短期基準	長期基準
南平		(×)	(×)	×	○
芝		—	—	(×)	(○)

※ () 付きの評価は有効測定日数を満たしていないので参考扱い

微小粒子状物質年平均値の経年変化



※ 有効測定日数を満たしていないデータを含む

(2) 自動車排出ガス測定局

ア 二酸化窒素

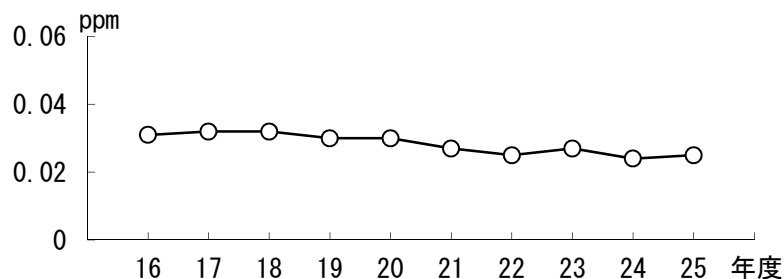
平成25年度は、すべての測定局で環境基準*を達成しました。

二酸化窒素の環境基準達成状況

測定局	年度	21	22	23	24	25
	評価方法	長期的評価				
安行		○	○	○	○	○
芝第二		○	○	—	—	—
神根		○	○	○	○	○

※ 芝第二測定局は平成22年度まで測定

二酸化窒素年平均値の経年変化



イ 浮遊粒子状物質

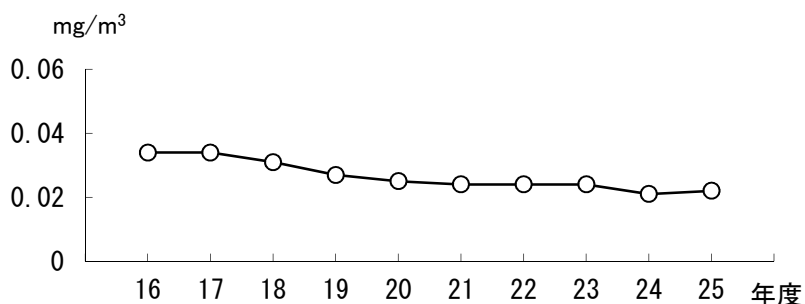
平成25年度は、すべての測定局で環境基準*を達成しました。近年ゆるやかな改善傾向を示し、平成16年度から連続して長期的評価による環境基準を達成しています。

浮遊粒子状物質の環境基準達成状況

測定局	年度	21		22		23		24		25	
		短期的評価	長期的評価	短期的評価	長期的評価	短期的評価	長期的評価	短期的評価	長期的評価	短期的評価	長期的評価
安行		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
芝第二		○	○	○	○	—	—	—	—	—	—
神根		○	○	○	○	○	○	×	○	○	○

※ 芝第二測定局は平成22年度まで測定

浮遊粒子状物質年平均値の経年変化



ウ 一酸化炭素

一酸化炭素は、ものの不完全燃焼によって発生する物質です。無色無臭の気体で、赤血球中のヘモグロビンと結合すると、頭痛やめまい、症状が悪化すると、吐き気、けいれん、呼吸困難等を引き起こします。

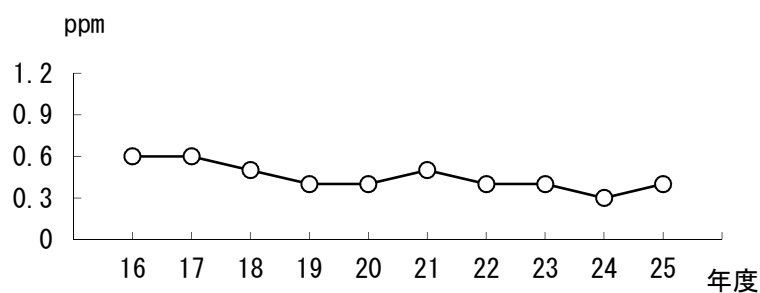
平成25年度は、環境基準*を達成しました。近年、短期的評価、長期的評価ともに環境基準を連続して達成しています。

一酸化炭素の環境基準達成状況

測定局	年度 評価方法	21		22		23		24		25	
		短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価	短期的 評価	長期的 評価
安行		○	○	○	○	—	—	—	—	—	—
神根		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※ 安行測定局は平成22年度まで測定

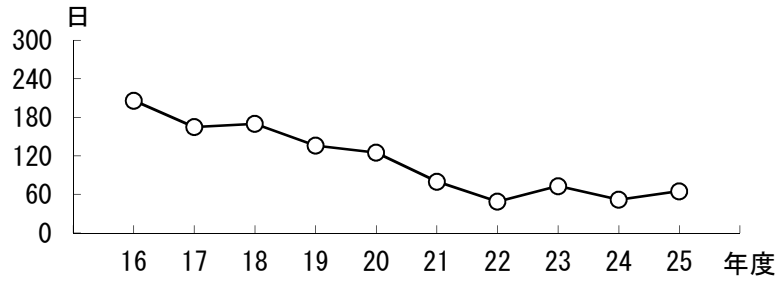
一酸化炭素年平均値の経年変化



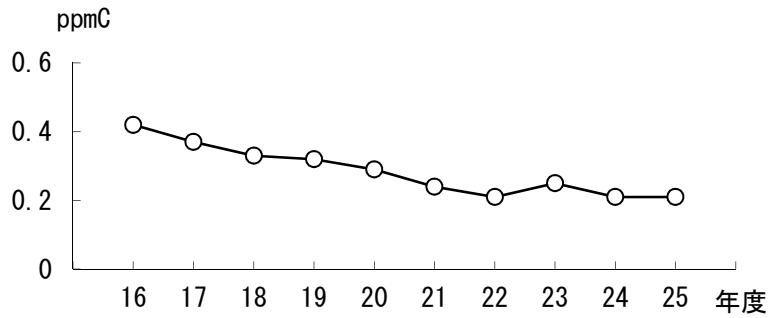
エ 非メタン炭化水素

午前6時から9時までの3時間平均値の指針値超過日数と濃度は、近年、減少傾向にあります。

非メタン炭化水素濃度の午前6時から9時までの
3時間平均値が指針値(0.31ppmC)を超えた日数



非メタン炭化水素午前6時から9時までの
3時間平均値の年平均値の経年変化



オ 微小粒子状物質（PM2.5）

本市の自排局では、平成24年2月から神根測定局で測定をしています。

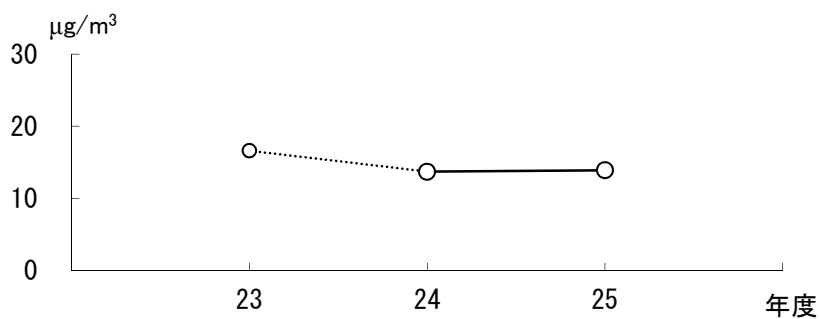
平成25年度は、長期基準は環境基準*を達成しましたが、短期基準は基準を超過しました。

微小粒子状物質の環境基準達成状況

年度		23		24		25	
測定局	評価方法	短期基準	長期基準	短期基準	長期基準	短期基準	長期基準
		神根	(×)	(×)	×	○	×

※ () 付きの評価は有効測定日数を満たしていないので参考扱い

微小粒子状物質年平均値の経年変化



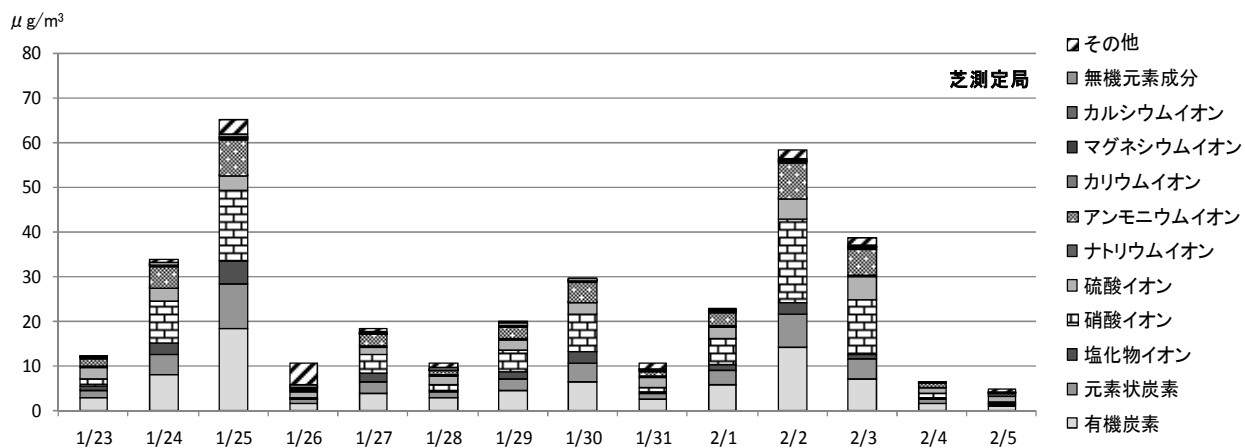
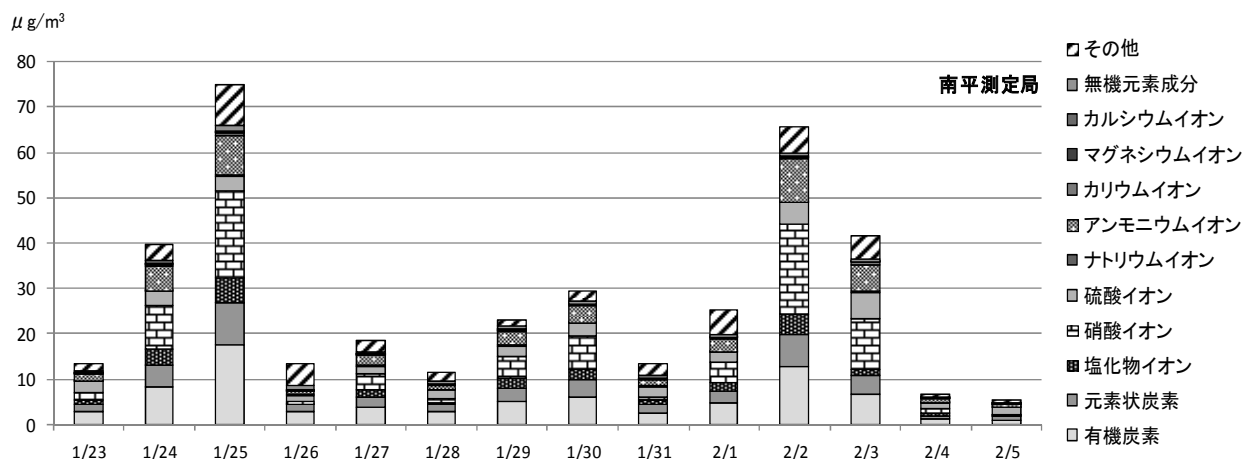
※ 平成23年度は有効測定日数を満たしていない参考データ

(3) 微小粒子状物質 (PM2.5) 成分分析

平成26年1月から2月にかけて、一般環境大気中の微小粒子状物質 (PM2.5) の成分分析を実施しました。南平測定局と芝測定局の結果を比較すると、各成分の経日変化は一致する傾向が見られました。また、マグネシウムイオンやカルシウムイオン、無機元素成分は南平測定局の方が芝測定局より高い濃度でした。

なお、高濃度となった1月25日および2月2日には硝酸イオン濃度が特に高くなっていました。

微小粒子状物質 (PM2.5) 成分の経日変化



2 対策

(1) 工場・事業場

ア 法・条例に係る届出状況

ばい煙*、揮発性有機化合物*、粉じん*、炭化水素*類および有害大気汚染物質を排出する工場・事業場については、その規模により「大気汚染防止法*」、「埼玉県生活環境保全条例*」に基づき規制されています。

大気汚染防止法に係る施設数

(平成26年3月31日現在)

区分	施設の種類	工場の施設数	事業場の施設数	施設数の合計
ばい煙発生施設	ボイラー	17	95	112
	小型ボイラー	62	22	84
	金属溶解炉	47	0	47
	金属加熱炉	14	0	14
	骨材乾燥炉	2	0	2
	その他の乾燥炉	2	0	2
	電気炉	1	0	1
	廃棄物焼却炉	0	6	6
	銅、鉛、亜鉛の溶解炉	3	0	3
	ガスタービン	2	24	26
	ディーゼル機関	2	82	84
	ガス機関	5	5	10
	合 計		157	234
揮発性有機化合物排出施設	印刷回路用銅張積層板、合成樹脂ラミネート容器包装、粘着テープ・粘着シート又は剥離紙の製造における接着の用に供する乾燥施設	2	0	2
	オフセット輪転印刷の用に供する乾燥施設	3	0	3
	グラビア印刷の用に供する乾燥施設	7	0	7
	合 計	12	0	12
一般粉じん発生施設	堆積場	1	4	5
	コンベア	12	0	12
	破碎機・磨砕機	1	0	1
	ふるい	1	0	1
	合 計	15	4	19

埼玉県生活環境保全条例に係る施設数

(平成26年3月31日現在)

区分	施設の種類	工場の施設数	事業場の施設数	施設数の合計
指定ばい煙発生施設	溶解炉（鋳造用）	2	0	2
	溶解炉（アルミニウム2次精錬用）	2	0	2
	廃棄物焼却炉	55	36	91
	合 計	59	36	95
指定炭化水素類発生施設	給油用地下タンク	0	151	151
	ドライクリーニング用乾燥機	0	43	43
	製造設備	129	0	129
	使用施設	8	0	8
	合 計	137	194	331
指定粉じん発生施設	堆積場	4	0	4
	コンベア	25	0	25
	破碎機・磨砕機	3	0	3
	破碎機（コンクリート用）	1	0	1
	ふるい	4	0	4
	バッチャープラント	12	0	12
	合 計	49	0	49

イ 立入検査状況

「大気汚染防止法*」および「埼玉県生活環境保全条例*」に係る施設を設置している事業所に対し、同法令の規定に基づいて立入検査を実施し、ばい煙*量等の自主測定、施設の維持管理等の指導を行っています。

平成25年度の立入検査件数は、次のとおりです。立入検査における指導内容は、ばい煙発生施設の測定義務違反等が22件、指定ばい煙発生施設の廃棄物焼却炉の温度記録等の維持管理基準違反等が14件、指定炭化水素類発生施設の届出義務違反等が7件、指定粉じん発生施設の届出義務違反が2件、および有害大気汚染物質排出事業所の測定義務違反が1件でした。

平成25年度 立入検査状況

施 設		項 目	立入検査数		指導件数
			事業所数	施設数	
大気汚染防止法		ばい煙発生施設	60	160	22
		揮発性有機化合物排出施設	3	10	0
		一般粉じん発生施設	1	3	0
		特定粉じん排出等作業	11	15	0
埼玉県生活環境保全条例		指定ばい煙発生施設	28	31	14
		指定炭化水素類発生施設	9	41	7
		指定粉じん発生施設	3	15	2
		有害大気汚染物質排出事業所	5	—	1

※ 指導件数は、事業所に対する届出指導および施設に対する指導の合計数

(2) 自動車排出ガス

自動車の排出ガス規制は、昭和41年9月の一酸化炭素規制*から始まり、その後、規制対象物質の追加などにより、逐次規制が強化されてきました。その一方、自動車が普及し、一般に定着したため、窒素酸化物*、浮遊粒子状物質の改善が図られませんでした。そこで、規制強化の必要性から、平成4年6月に「自動車から排出される窒素酸化物の特定地域における総量の削減等に関する特別措置法」（自動車NO_x法）が公布、平成13年6月には同法が改正され、「自動車から排出される窒素酸化物及び粒子状物質の特定地域における総量の削減等に関する特別措置法*」（自動車NO_x・PM法）が公布されました。

また、さらなる改善を目指して、平成15年10月に八都県市（現「九都県市*」）によりディーゼル車規制が始まりました。これは、微粒子除去装置を装着していないディーゼル車に対して、八都県市への乗り入れを禁止する非常に厳しい規制です。この結果、特に浮遊粒子状物質について大幅な改善が見られました。

本市では、毎週水曜日をノーカーデーと定め、公用車や職員の自家用車の使用抑制に取り組むとともに、関東運輸局埼玉運輸支局、川口警察署、埼玉県自動車整備振興会川口支部等と合同で、毎年6月に街頭検査を実施し、自動車排出ガス中の一酸化炭素および炭化水素*濃度の測定を行っています。その他、アイドリングストップ*の励行、市民、事業者に対する啓発活動も行っています。

(3) 光化学スモッグ被害の防止

埼玉県では「埼玉県大気汚染緊急時対策要綱」に基づき、光化学スモッグ注意報等の発令を行っています。さらに、重大緊急報が発令された場合には、オキシダント大量ばい煙発生事業者およびオキシダントばい煙発生事業者に対して、燃料使用量の削減を依頼または命令する等の緊急時の措置を行っています。

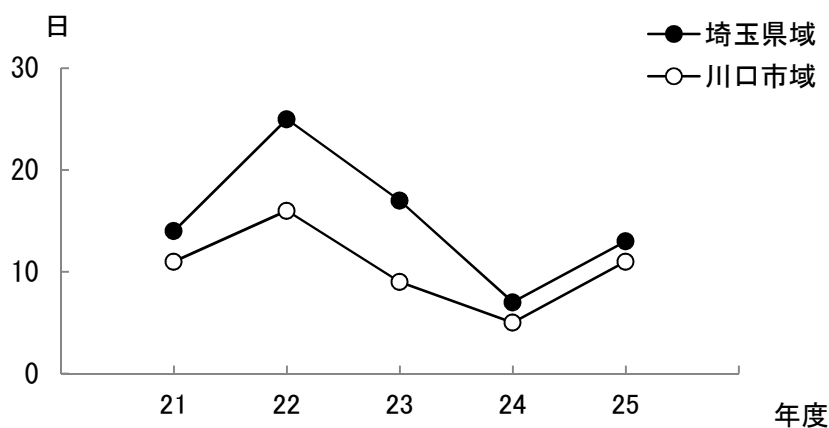
また、注意報等の発令があった場合、本市では、公共施設等で看板の掲示や、防災行政無線などを通じて市民に周知し、被害の未然防止を呼びかけています。

光化学スモッグ注意報等発令日数および健康被害届出者数

年度	月別	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計	被害届出者数
	区域								
21	埼玉県域	0	4	3	4	3	0	14	0
	川口市域	0	4	2	2	3	0	11	0
22	埼玉県域	0	1	3	7	9	5	25	7
	川口市域	0	0	0	6	7	3	16	3
23	埼玉県域	0	1	3	4	7	2	17	9
	川口市域	0	0	0	1	6	2	9	0
24	埼玉県域	1	0	0	4	1	1	7	0
	川口市域	1	0	0	3	1	0	5	0
25	埼玉県域	0	0	0	5	8	0	13	0
	川口市域	0	0	0	5	6	0	11	0

※ 平成21年度から平成25年度は警報および重大緊急報を発令していない

光化学スモッグ注意報発令日数の経年変化



(4) 微小粒子状物質（PM2.5）による被害の防止

埼玉県および川口市では微小粒子状物質（PM2.5）*による健康被害防止の意識の高まりを受け、平成25年3月から注意喚起の周知を開始しました。

開始当初は市独自の判断基準を適用していましたが、平成25年11月から埼玉県の判断基準を適用しています。注意喚起の判断は、午前、正午、夕方の1日に3回行います。

また、注意喚起が行われた場合、本市では、公共施設等でお知らせの掲示や、防災行政無線などを通じて市民に周知し、被害の未然防止を呼びかけます。

開始当初から平成25年度末まで埼玉県南部、川口市ともに注意喚起はありません。

埼玉県の注意喚起判断基準

午前の予測	県南部におけるPM2.5の測定局について、次の値を算出。 1. 測定局ごとに早朝3時間（午前4時から午前7時まで）の測定値平均を算出 2. 1の値から中央値を算出 算出された中央値が $85\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超過している場合に、日平均値が $70\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超過する恐れがあると判断する。
正午の予測	県南部におけるPM2.5の測定局について、次の値を算出。 1. 測定局ごとに早朝から8時間（午前4時から正午まで）の測定値平均を算出 2. 1の値から最大値を算出 算出された最大値が $80\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超過している場合に、日平均値が $70\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超過する恐れがあると判断する。
夕方の予測	県南部におけるPM2.5の測定局について、以下の2つのうち、どちらかに該当する場合。 1. 1つの測定局において、以下(1)から(4)を全て満たす場合 (1)測定局ごと、午後1時から午後4時の測定値の平均が $70\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以上 (2)測定局ごと、午後2時から午後5時の測定値の平均が $70\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以上 (3)測定局ごと、午前0時から午後4時の測定値の平均が $50\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以上 (4)測定局ごと、午前0時から午後5時の測定値の平均が $50\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以上 2. 1つの測定局において、以下(5)および(6)を満たす場合 (5)測定局ごと、午前0時から午後4時の測定値の平均が $65\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以上 (6)測定局ごと、午前0時から午後5時の測定値の平均が $65\mu\text{g}/\text{m}^3$ 以上 ※ 気象条件を考慮しつつ、日平均値で $70\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超過する恐れがある場合は、柔軟に注意喚起をする。

第2節 有害化学物質

市内における状況を把握するため、本市では有害大気汚染物質およびダイオキシン類*について、調査を実施しています。

また、法令で定められた化学物質について、事業者から届出があった排出量・取扱量等を集計し、公表を行う等の自主管理の促進を図っています。

1 現況

(1) 有害大気汚染物質

有害大気汚染物質とは「大気汚染防止法*」において「継続的に摂取することにより人の健康を損なう、またはそのおそれのある化学物質」と定められています。これらのうち、健康リスクがある程度高いと考えられ、特に優先的に対策に取り組むべき物質である優先取組物質について、測定を実施しています。

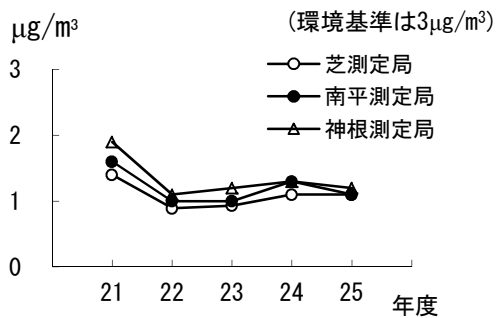
環境基準*の定められている4物質については、平成25年度は、すべての測定地点で環境基準を達成しました。

有害大気汚染物質の環境基準達成状況

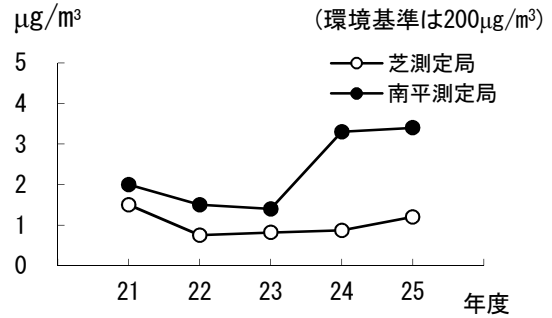
測定項目	測定地点	年度				
		21	22	23	24	25
ベンゼン*	芝測定局	○	○	○	○	○
	南平測定局	○	○	○	○	○
	神根測定局	○	○	○	○	○
トリクロロエチレン*	芝測定局	○	○	○	○	○
	南平測定局	○	○	○	○	○
テトラクロロエチレン*	芝測定局	○	○	○	○	○
	南平測定局	○	○	○	○	○
ジクロロメタン*	芝測定局	○	○	○	○	○
	南平測定局	○	○	○	○	○

※ 「○」は達成、「×」は非達成を示す
 ※ 平成23年度までは南消防署、平成24年度からは南平測定局で測定

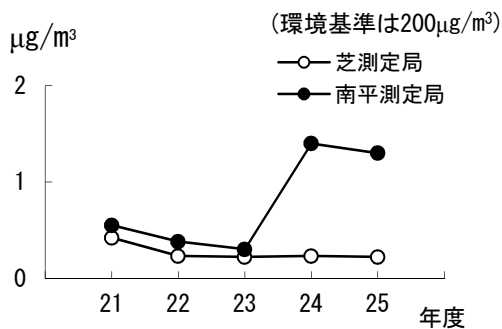
ベンゼン年平均値の経年変化



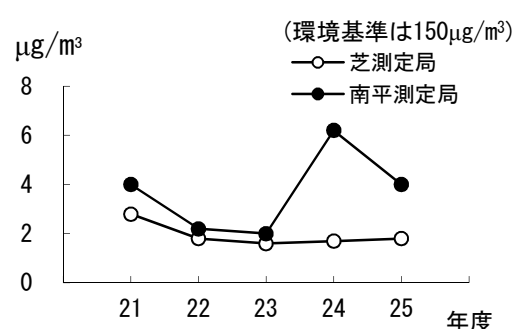
トリクロロエチレン年平均値の経年変化



テトラクロロエチレン年平均値の経年変化



ジクロロメタン年平均値の経年変化



(2) ダイオキシン類

「ダイオキシン類対策特別措置法*」に基づき、大気、河川水、河川底質、地下水および土壌についてダイオキシン類*の調査を実施しています。

平成25年度 ダイオキシン類の測定地点図

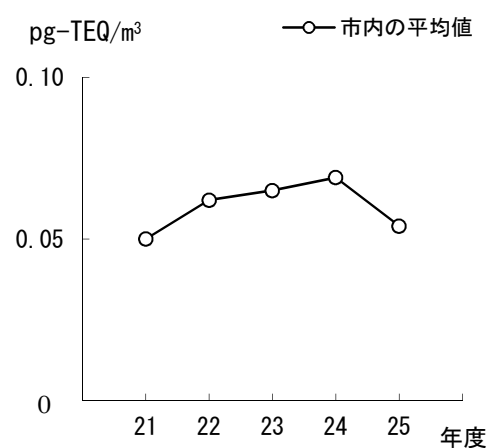


ダイオキシン類については、大気、河川水、河川底質、地下水および土壌いずれも環境基準*を達成しました。

平成25年度 ダイオキシン類測定結果

	測定地点	測定値	環境基準
大 気	南 平 測 定 局	0.051	0.6 (pg-TEQ/m ³)
	安 行 東 小 学 校	0.055	
	芝 測 定 局	0.055	
河 川 水	山王橋(新芝川)	0.35	1 (pg-TEQ/L)
河川底質	山王橋(新芝川)	9.5	150 (pg-TEQ/g)
地 下 水	戸 塚 南 地 区	0.043	1 (pg-TEQ/L)
土 壌	本 町 公 園	0.22	1000 (pg-TEQ/g)
	西川口4丁目公園	2.9	
	三 ッ 和 公 園	8.1	

大気中のダイオキシン類の 平均値の経年変化



※ 大気、河川水は年2回の平均値

2 対策

(1) 工場・事業場

ア 法に係る届出状況

「ダイオキシン類対策特別措置法*」では、ダイオキシン類*を発生する施設を特定施設として定めています。特定施設を設置する事業者（以下、設置者）は届出のほか、毎年1回以上、排出ガス、排出水、ばいじんや燃え殻のダイオキシン類を測定し、その結果を報告する義務があります。

平成25年度末の特定施設設置数は、大気関係施設が9施設、水質関係施設が7施設です。

特定施設設置数

(平成26年3月31日現在)

施設名		施設数
大気関係	製鋼用電気炉	1
	アルミニウム合金製造溶解炉	0
	廃棄物焼却炉（50kg/h以上）	8
水質関係	カーバイド法アセチレンの製造の用に供するアセチレン洗浄施設	1
	廃棄物焼却炉に係る排ガス洗浄施設、湿式集じん装置	4
	廃棄物焼却炉に係る灰の貯留施設	2
施設数合計		16
事業所数合計		7

イ 立入検査状況

「ダイオキシン類対策特別措置法*」の定める廃棄物焼却炉等の設置者に対して、ダイオキシン類*に係る排出基準の遵守状況を確認するため、同法の規定に基づいて立入検査を実施し、適正な運転管理の指導に努めています。

平成25年度 立入検査状況

施設名		対象事業所数	立入検査数	
			施設数	事業所数
大気関係	製鋼用電気炉	1	1	1
	アルミニウム合金製造溶解炉	1	1	1
	廃棄物焼却炉	5	8	5
	小計	7	10	7
水質関係	廃棄物焼却炉に係る灰の貯留施設	1	0	0
合計		7	10	7

※ 特定施設設置数と立入検査対象事業所数は必ずしも一致しない

※ 水質関係は循環使用または公共下水道接続により、公共用水域に汚水を排出しないものは対象から除く

(2) 野外焼却

野外焼却とは、適正な設備を用いずに廃棄物*等を焼却する行為を指しており、宗教行事等の例外を除いて、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」、「埼玉県生活環境保全条例*」により禁止されています。具体的には、地面に穴を掘って焼却すること、ドラム缶やブロックで作った簡易な構造の焼却炉を使用して焼却することなどです。

こうした行為は、燃焼温度が十分に上がらず不完全燃焼を起こし、煙や悪臭*はもちろん、ダイオキシン類*および微小粒子状物質(PM2.5)*の発生につながります。

本市では野外焼却禁止の啓発活動として、広報誌への掲載、チラシの投函およびパトロールを実施するなど、生活環境の保全に努めています。

3 化学物質の適正管理

(1) 法・条例に係る届出状況

「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律（P R T R法）」、「埼玉県生活環境保全条例*（県条例）」に基づき、人や生態系に有害なおそれがある化学物質を一定量以上取扱う事業者は、毎年度、化学物質の環境中への排出量・取扱量等について届出・報告を行い、行政がその集計結果を公表することになっています。

平成24年度（平成25年度中の集計）は「P R T R法」に基づく届出が87件、「県条例」に基づく報告が96件ありました。

また、オンラインによる提出（電子情報処理組織による届出および電子申請・届出サービスによる報告）の普及促進に努めていますが、この方法による件数は、総件数の半数程度といまだ少ないことから、今後も継続して啓発をしていきます。

化学物質管理制度に係る届出・報告件数

項目		年度	22	23	24
法律	書面による届出		40	41	36
	磁気ディスクによる届出		1	0	4
	電子情報処理組織による届出		44	51	47
	合計		85	92	87
県条例	紙面による報告		51	58	53
	電子申請・届出サービスによる報告		38	40	43
	合計		89	98	96

※ 平成23年度は、合併前の鳩ヶ谷市分を含む

(2) 排出量・移動量・取扱量

「P R T R法」に基づき届出された第1種指定化学物質の排出量は208t、同じく事業所の外への移動（廃棄物*移動）や下水道への移動量は483tであり、排出量・移動量の合計は691tでした。また、県条例に基づき報告された対象化学物質の取扱量は37,123tでした。

物質別の排出量では、トルエン*が148t、キシレン*が18t、物質別の移動量では、トルエンが212t、マンガン及びその化合物*が140tを占めています。

第1種指定化学物質の排出量・移動量

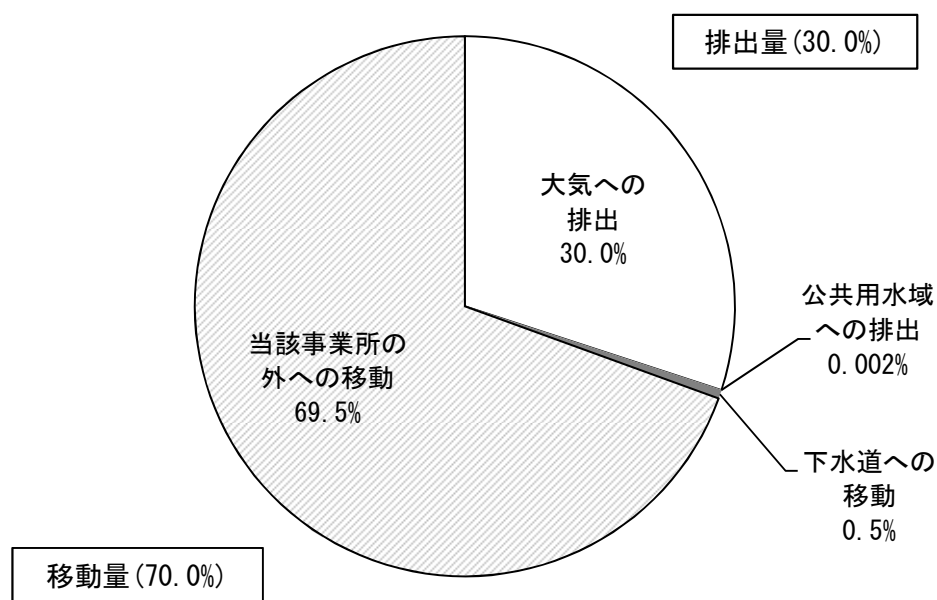
(単位：t)

項目	年度	22	23	24
	排出量・移動量合計		743	765
排出量	大気への排出	209	232	208
	公共用水域への排出	0.02	0.03	0.02
	土壌への排出	—	—	—
	埋立処分	—	—	—
	小計	209	233	208
移動量	事業所の外への移動 (廃棄物への移動)	530	528	480
	下水道への移動	3	4	3
	小計	534	532	483

※ 排出量・移動量を四捨五入したため、合計は一致しない

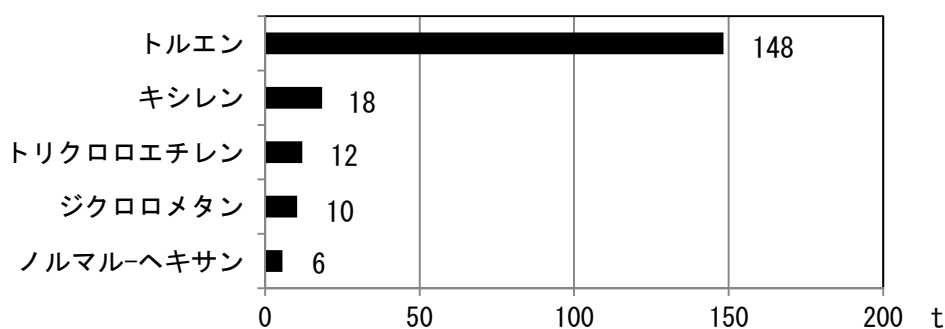
※ 平成23年度は、合併前の鳩ヶ谷市分を含む

平成24年度 排出量・移動量の割合

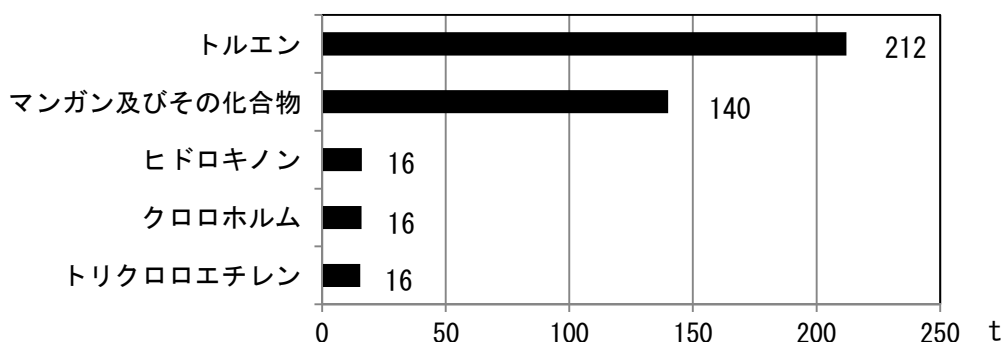


※ 割合 (%) は四捨五入して表記しているため、合計が100%にならないことがある

平成24年度 排出量上位5物質



平成24年度 移動量上位5物質



平成24年度 取扱量の内訳

(単位：t)

項目	物質	対象化学物質			合計
		第1種指定化学物質	第2種指定化学物質	県規則で定める物質	
取扱量		31,986 (33,786)	96 (83)	5,040 (6,175)	37,123 (40,044)
	使用量	10,397 (12,283)	23 (14)	4,884 (5,839)	15,304 (18,136)
	製造量	1,258 (1,220)	73 (69)	157 (338)	1,488 (1,627)
	取り扱う量	20,324 (20,281)	0 (0)	0 (0)	20,324 (20,281)

※ 取扱量とその内訳は有効数字の関係で一致しない

※ () 内は前年度のデータ

(3) 取扱(排出)事業者に対する行政指導

「埼玉県生活環境保全条例*」では、特定化学物質の取扱いにより生ずる環境への負荷を低減し、生活環境の保全に関する取組を推進するため、対象となる事業所ごとに「環境負荷低減主任者」の選任と、化学物質の適正管理体制や取扱い方法等について整理した「特定化学物質等適正管理手順書」の提出が義務付けられています。

また、対象事業所に対し立入検査を行い、選任・報告に対し指導・助言し、事業者の自主管理の促進を図っています。

第3節 水環境

市内の水環境については、埼玉県知事が作成した「公共用水域水質測定計画」および「地下水質測定計画」に基づき、水質調査を実施しています。

平成25年度 水環境の調査地点図



1 現況

(1) 各河川の水質

本市では、「公共用水域水質測定計画」で埼玉県が定めた環境基準点など2地点の他に、本市が独自に定めた7地点、計9地点について水質調査を実施しています。人の健康を損なう恐れのある物質として定められた健康項目、一般項目、BOD*等の生活環境項目、特殊項目、要監視項目、要測定指標項目およびその他の項目について、測定を実施しています。平成25年度の健康項目については、すべての地点で環境基準*を達成しました。BODについては、芝川の青木橋は減少傾向にあります。その他の地点については横ばいの傾向にあります。

BOD75%水質値*の環境基準達成状況

(単位 mg/L)

河川名	水域 類型*	調査 地点名	年度					環境基準
			21	22	23	24	25	
芝川	D	在家橋	○(6.4)	○(8.2)	○(6.8)	○(7.7)	○(4.8)	8以下
		天神橋	○(7.1)	○(5.9)	○(5.6)	○(7.1)	○(4.5)	
		青木橋	—	—	○(10)	×(8.7)	×(8.1)	
新芝川	D	山王橋	○(5.2)	○(5.5)	○(5.7)	○(4.9)	○(4.0)	8以下
綾瀬川	C	綾瀬新橋	○(4.5)	○(4.8)	×(5.3)	○(5.0)	○(3.4)	5以下

※ 「○」は達成、「×」は非達成を示す

※ 芝川および新芝川は平成23年度までE類型、平成24年度からD類型へ変更

※ 青木橋の平成21年度および平成22年度の測定は、河川工事のため、欠測

ア 芝川水系(4地点：D類型)

芝川は天神橋の先で芝川と新芝川に分岐しています。

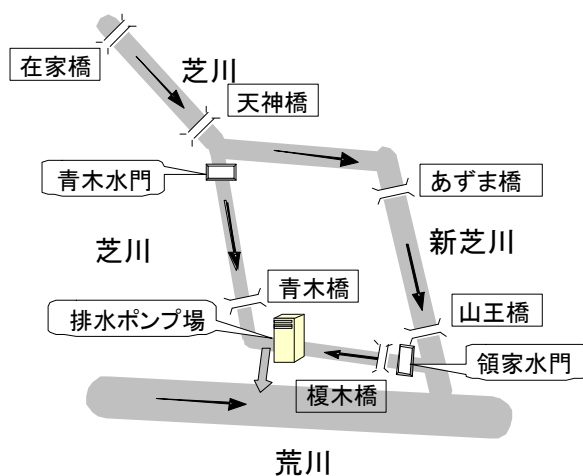
青木水門から下流の芝川は、勾配がほとんどなく青木水門と県境の領家水門の区間が閉鎖性の水域となっているため、途中の排水ポンプ場から荒川へ放水しています。

新芝川は、天神橋の先の分岐点からあずま橋、山王橋を経て荒川に流入しています。

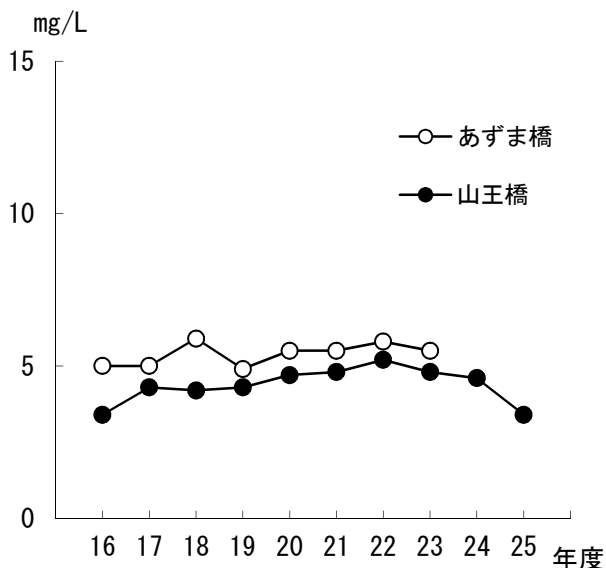
芝川(在家橋・天神橋・青木橋)、新芝川(山王橋)、の合計4地点について水質調査を実施しています。そのうち新芝川の山王橋が環境基準点となっています。

青木橋は改善傾向にあります、その他の地点は平成15年度に大きく改善し、その後横ばいの傾向にあります。

芝川水系概略図

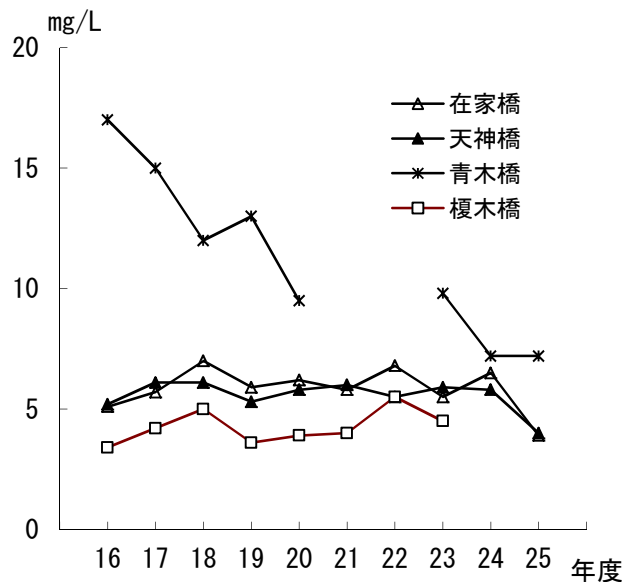


新芝川(あずま橋・山王橋) BOD年平均値の経年変化



※ あずま橋は平成23年まで測定

芝川(在家橋・天神橋・青木橋・榎木橋) BOD年平均値の経年変化



※ 青木橋の平成21年度および平成22年度の測定は、河川工事のため、欠測

※ 榎木橋は平成23年度まで測定

イ 綾瀬川（1地点：C類型）

綾瀬川は、本市の北東部にあり、越谷市や草加市との市境沿いを流れて東京都葛飾区で中川に合流しています。

昭和55年から連続して15年間、国が管理している河川の中で、最も汚れた川とされていましたが、近年のBOD*年平均値は5 mg/L前後で推移しており、水質の改善が進んでいます。

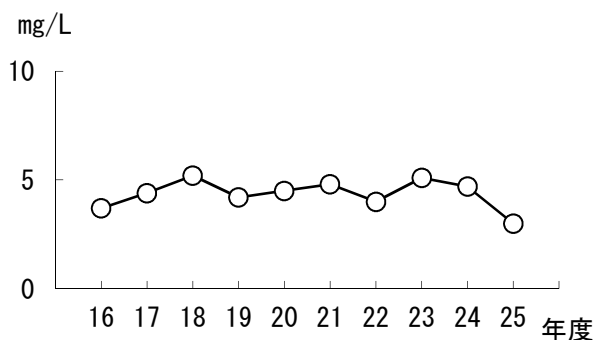
ウ その他の河川（4地点）

さいたま市南区大谷場から本市の柳崎を流れ、芝川に合流する藤右衛門川（論處橋）、前川から上青木を流れ芝川に流入する豎川（新橋）、安行慈林から新郷地区を流れる毛長川（舎人橋）および戸塚地区から安行地区を流れる伝右川（吉長橋）の合計4地点について水質調査を実施しています。このうち藤右衛門川の論處橋は、測定計画で定められている調査地点です。

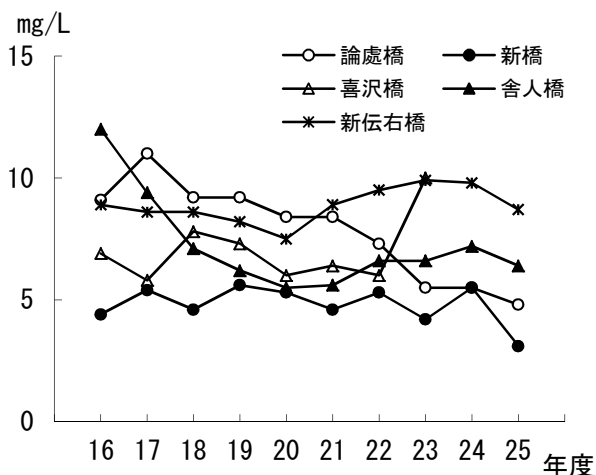
これらの河川は、平成15年度にBOD年平均値が大幅に減少し、その後は横ばいの状況が続いています。

綾瀬川（綾瀬新橋）

BOD年平均値の経年変化



藤右衛門川等5河川のBOD年平均値の経年変化



- ※ 河川工事のため、平成22年度の毛長川については新砂子路橋、平成24、25年度の伝右川については吉長橋で測定
- ※ 緑川の喜沢橋は平成23年度まで測定
- ※ 豎川は平成23年度まで豎前橋で測定

(2) 河川底質

新芝川の山王橋、藤右衛門川の論處橋において毎年1回、重金属類*等の測定を実施しています。総水銀、PCB*については一律の「暫定除去基準」が定められています。いずれも基準を下回っています。

平成25年度 河川底質調査結果

(単位：mg/kg 乾泥)

項目	河川	新芝川 (山王橋)	藤右衛門川 (論處橋)
総水銀		0.039	0.022
アルキル水銀		不検出	不検出
PCB		<0.05	<0.05

(3) 地下水

揮発性有機化合物*や重金属類*等による地下水の汚染は大きな社会問題となっています。このため、平成元年から地下水の水質汚染の状況を常時監視*することとされ、平成9年3月に地下水の環境基準*が設定されました。

本市では、埼玉県が作成した「地下水質測定計画」に基づき、概況調査と継続監視調査を実施しています。

概況調査は、地域の全体的な地下水質の概況を把握するために実施する調査で、市内を概ね2kmメッシュに分割し、5年間ですべての調査区域を一巡するローリング方式で実施することになっており、平成25年度は2地点について調査を実施しました。

継続監視調査は、過去の調査により汚染が確認されている井戸を継続的に監視する調査を実施するもので、平成25年度は6地点について調査を実施しました。

その結果、継続監視調査における3地点において、環境基準を達成しない項目がありました。

また、新たに汚染が確認された井戸については、継続的に監視をするとともに、汚染源の特定に努めています。

概況調査結果

項目 \ 年度	21	22	23	24	25
調査井戸数	3	3	3	4	2
環境基準超過井戸数	0	0	0	1	0
環境基準超過項目数	0	0	0	1	0

平成25年度 継続監視調査結果

(単位：mg/L)

項目 \ 地区	本町	幸町	鳩ヶ谷本町	東貝塚	赤山	戸塚	環境基準
1,1-ジクロロエチレン	0.011	<0.002	—	—	—	—	0.1
1,2-ジクロロエチレン	0.063	0.008	—	—	—	—	0.04
トリクロロエチレン	0.20	0.004	—	—	—	—	0.03
テトラクロロエチレン	0.0034	0.013	—	—	—	—	0.01
硝酸性窒素 及び亜硝酸性窒素	—	—	7.8	10	9.9	11	10

2 対策

(1) 工場・事業場

ア 法・条例に係る届出状況

公共用水域*の水質汚濁*防止のため、汚水や廃液を排出する工場・事業場には、「水質汚濁防止法*」、「埼玉県生活環境保全条例*」により、施設設置の届出を始め、排水基準の遵守、汚染状態の測定等が義務付けられています。本市では、工場・事業場の立入検査・行政指導を行っているほか、公共用水域のパトロールも随時行っています。

水質汚濁防止法に係る特定事業場数

(平成26年3月31日現在)

番号	業種・施設名	特定事業場数		
		規制対象	規制対象外	合計
2	畜産食料品	0	2	2
4	保存食料品	0	4	4
5	みそ・しょう油・他	1	1	2
8	パン・菓子・製あん	0	1	1
16	めん類	0	2	2
17	豆腐・煮豆	1	27	28
19	紡績業・他	0	1	1
23	パルプ、紙又は紙加工品	1	0	1
23の2	新聞業・他	0	4	4
27	無機化学工業	1	1	2
28	アセチレン誘導品	0	1	1
35	有機ゴム製品	2	0	2
38	石けん	0	1	1
47	医薬品製造	0	1	1
53	ガラス・他	0	1	1
55	バッチャープラント	0	9	9
61	鉄鋼業	1	0	1
63	金属製品・他	1	7	8
64の2	水道施設	1	2	3
65	酸・アルカリ	7	24	31
66	電気めっき	8	7	15
66の3	旅館業	6	1	7
66の4	共同調理場	1	0	1
67	洗濯業	6	73	79
68	写真現像業	0	8	8
68の2	病院	1	0	1
71	車両洗浄施設	0	37	37
71の2	試験研究機関	1	3	4
71の3	一般廃棄物	1	0	1
71の5	TCE等洗浄施設	1	1	2
72	し尿処理施設	8	0	8
2001	指定地域特定施設	38	0	38
	合計	87	219	306

埼玉県生活環境保全条例に係る指定排水工場等数

(平成26年3月31日現在)

記号	業種・施設名	指定排水工場等数					
		法対象有		条例のみ		合計	
		規制対象	規制対象外	規制対象	規制対象外	規制対象	規制対象外
口	厨房施設	1	0	0	0	1	0
ハ	厨房施設(病院以外)	7	0	2	0	9	0
ニ	コルゲートマシン	0	0	0	0	0	0
ホ	飲食店	1	0	2	0	3	0
合 計		9	0	4	0	13	0

イ 立入検査状況

「水質汚濁防止法*」、「埼玉県生活環境保全条例*」の規定に基づいて立入検査を実施しています。

違反した工場・事業場に対しては指導を行い、違反の原因、対策の報告を求めています。

工場・事業場の立入検査状況

項目		年度				
		2 1	2 2	2 3	2 4	2 5
対象工場・事業場数		81	80	88	108	68
立入検査数		120	141	162	186	169
結 果	適 合	94	120	130	151	149
	適合率 (%)	78.3	85.1	80.2	81.2	88.2
	不 適 合	26	21	32	35	20
	不適合率 (%)	21.7	14.9	19.8	18.8	11.8
行政指導	不 適 合 通 知	22	19	17	21	15
	注 意	3	1	10	6	22
	勧 告	1	1	5	8	1

(2) 生活排水

河川の水質は、工場・事業場への規制の強化や自主的な取組み、また、公共下水道の整備により、平成15年に大きく改善し、平成16年以後は横ばいとなっています。

今後の更なる水質改善のためには、生活排水*対策が重要な施策となっています。

本市では、公共下水道の整備を進めるとともに、浄化槽の適正管理指導、単独処理浄化槽(し尿のみを処理するもの)から合併処理浄化槽(し尿と生活雑排水を処理するもの)への転換促進等を目的とした、浄化槽設置整備補助金の交付(下水道事業計画策定区域以外のみ)および啓発事業等を実施し、汚濁負荷の軽減に努めています。

下水道整備状況(総人口比)

各年度3月31日現在(単位:%)

年度	21	22	23	24	25
人口比	82.1	82.7	84.6	85.2	85.5

平成25年度 浄化槽設置整備補助金交付件数

人槽区分	件数
5人槽	3(0)
6~7人槽	2(0)
8~10人槽	0(0)
合計	5(0)

※ () 内は転換件数

(3) 公共用水域の異常水質

公共用水域*の異常水質には、有害物質や油の流入、着色水のほか夏季における酸素欠乏等があげられます。これらに対しては、関係機関と連携し、汚濁物質・発生源の特定や、更なる被害の拡大・拡散防止に努めています。

第4節 土壤汚染・地盤沈下

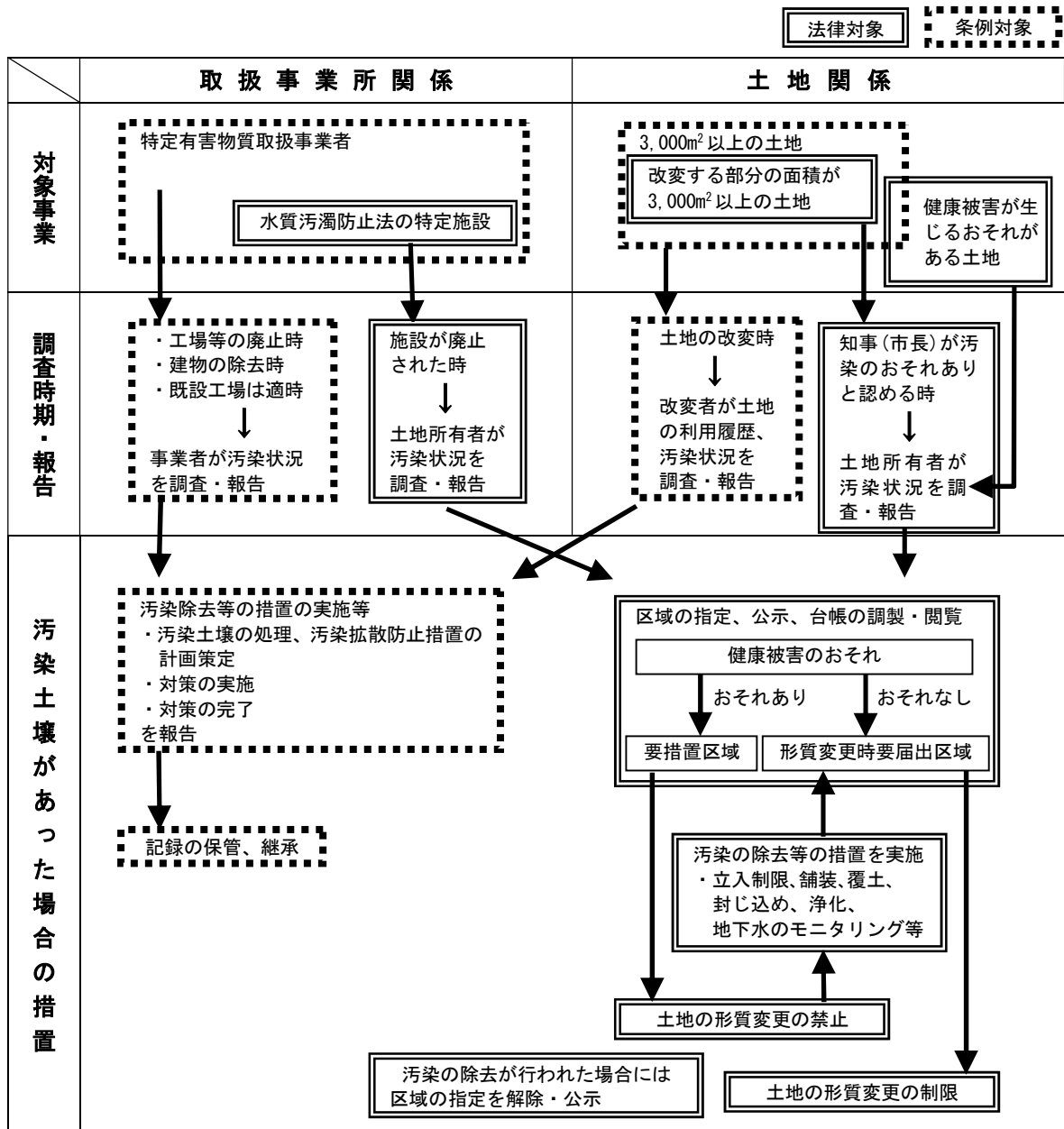
1 土壤汚染

(1) 概況

「土壤汚染対策法」や「埼玉県生活環境保全条例*」では、有害物質を使用する施設の廃止時等の一定の機会をとらえて土壤調査を実施すること、土壤汚染*が判明し、人への健康被害が生じるおそれのある場合には必要な措置をとることを定めています。

また、同法に基づく調査の結果、特定有害物質による土壤汚染の状態が指定基準を超過した土地においては、健康被害のおそれの有無を判断し、要措置区域と形質変更時要届出区域に分類、区域を指定し、公示します。

土壤汚染対策法および埼玉県生活環境保全条例の体系



(2) 調査報告

有害物質を取扱っている工場・事業場を廃止した場合は、土壌汚染*の調査を実施しなければなりません。また、調査により汚染が判明した場合、汚染土壌の浄化や搬出等の対策も必要となります。

本市では、土壌汚染調査・対策等に係る指導のほか、「水質汚濁防止法*」に定める施設の設置に係る届出がなされた時に、土壌汚染の未然防止を目的とした指導も行っています。

土壌汚染対策法に係る報告件数

年度	2 1	2 2	2 3	2 4	2 5
施設廃止時の調査	1	1	2	5	1
土地改変時の調査	—	7	10	16	17

埼玉県生活環境保全条例に係る報告件数

年度	2 1	2 2	2 3	2 4	2 5
施設廃止時の調査	4	11	1	6	6
土地改変時の調査	11	6	12	16	14

(3) 現況

本市では、要措置区域が1件、形質変更時要届出区域が4件指定されています。また、埼玉県生活環境保全条例に基づいた調査では、1件の汚染が判明しています。

土壌汚染対策法による指定区域の指定状況

(平成26年3月31日現在)

汚染あり	要措置区域	形質変更時要届出区域
	1	4
浄化対策中	0	0

埼玉県生活環境保全条例による汚染判明状況

(平成26年3月31日現在)

汚染あり	1
浄化対策中	0

2 地盤沈下

地盤沈下*については、国および埼玉県が観測を行っています。本市には国の観測地点が4カ所および県の観測地点が17カ所あり、合計21カ所において観測されています。

地盤沈下を防止するためには、過剰な地下水の汲み上げを規制することが必要です。

近年の沈下状況は、「工業用水法」、「建築物用地下水の採取の規制に関する法律」および「埼玉県生活環境保全条例*」による規制や、埼玉県の水源転換の促進により、沈静化の傾向にありました。

なお、平成23年は3月11日の東北地方太平洋沖地震により、地殻全体が沈下したものと考えられています。

市内における最大地盤沈下量

(単位：mm)

年	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
最大沈下量	—	14	5	1	7	7	—	13	37	6

※ 埼玉県地盤沈下調査報告書より

※ —：沈下せず

揚水施設数

(平成26年3月31日現在)

根拠法令	件数	事業所数	施設数
工業用水法		0	0
建築物用地下水の採取の規制に関する法律		0	0
埼玉県生活環境保全条例	許可	10	43
	届出	93	93

平成25年度は、幹線道路8路線9評価区間について周辺の個々の住居における騒音の環境基準*の達成状況を評価しました。

なお、環境基準の達成率は、県道足立川口線で68.8%でしたが、その他の道路については、95%以上となっています。

平成25年度 自動車騒音の環境基準達成状況

地点番号	評価対象道路	評価区間の延長 km	評価対象住居等戸数 戸	昼間・夜間とも 基準値以下		昼間のみ 基準値以下		夜間のみ 基準値以下		昼間・夜間とも 基準値超過	
				戸	%	戸	%	戸	%	戸	%
①	国道298号	3.1	285	283	99.3	2	0.7	0	0.0	0	0.0
②	県道足立川口線	1.4	224	154	68.8	6	2.7	0	0.0	64	28.6
③	県道さいたま川口線	0.1	53	53	100	0	0.0	0	0.0	0	0.0
④	県道さいたま草加線	1.1	528	528	100	0	0.0	0	0.0	0	0.0
⑤	県道川口停車場線	0.8	2,239	2,126	95.0	94	4.2	0	0.0	19	0.8
⑥	県道吉場安行東京線	2.9	419	417	99.5	1	0.2	0	0.0	1	0.2
⑦	県道吉場安行東京線	1.2	266	266	100	0	0.0	0	0.0	0	0.0
⑧	県道蕨鳩ヶ谷線	4.5	3,579	3,577	99.9	2	0.1	0	0.0	0	0.0
⑨	市道幹線60号	2.1	476	476	100	0	0.0	0	0.0	0	0.0

※ 割合(%)は四捨五入して表記しているため、合計が100%にならないことがある

平成25年度 幹線道路における自動車騒音・道路交通振動測定結果

地点番号	対象道路	測定地点	時間帯	騒音	振動
				等価騒音 レベル L _{Aeq} (dB)	時間率振動 レベル L ₁₀ (dB)
①	国道298号	安行出羽1-4付近	昼間	63	45
			夜間	61	43
②	県道足立川口線	江戸袋1-34付近	昼間	69	50
			夜間	65	47
③	県道さいたま川口線	柳崎3-22付近	昼間	65	41
			夜間	59	34
④	県道さいたま草加線	赤井1-22付近	昼間	68	45
			夜間	64	39
⑤	県道川口停車場線	本町2-2付近	昼間	67	36
			夜間	64	32
⑥	県道吉場安行東京線	安行原2155付近	昼間	69	47
			夜間	66	41
⑦	県道吉場安行東京線	峯255付近	昼間	70	47
			夜間	67	40
⑧	県道蕨鳩ヶ谷線	前川1-1付近	昼間	67	46
			夜間	63	38
⑨	市道幹線60号	安行領家870付近	昼間	67	45
			夜間	64	40

2 工場・事業場

著しく騒音*や振動*を発生する施設（特定施設等）を設置または使用する工場・事業場は、「騒音規制法」、「振動規制法」および「埼玉県生活環境保全条例*」に基づき、届出が義務付けられています。

上記法令に基づく届出の際、騒音・振動公害の未然防止のために規制基準を遵守するよう指導を行っています。

また、工場・事業場などの開発行為許可申請および中高層建築物の事前協議の際にも防音・防振対策の指導を行っています。

平成25年度末の上記法令に基づく特定施設等の届出件数は以下のとおりであり、金属加工機械と空気圧縮機等が大半を占めています。

騒音規制法に係る特定施設届出件数

（平成26年3月31日現在）

特定施設の種類	届出件数	特定施設の種類	届出件数
金属加工機械	1,057	建設用資材製造機械	13
圧延機械	16	コンクリートプラント	11
製管機械	4	アスファルトプラント	2
ベンディングマシン	62	穀物用製粉機	10
液圧プレス	224	木材加工機械	82
機械プレス	492	帯のご盤	10
せん断機	131	丸のご盤	35
鍛造機	13	かな盤	37
ワイヤーフォーミングマシン	36	抄紙機	3
ブラスト	34	印刷機械	322
タンブラー	5	合成樹脂用射出成形機	342
切断機	40	鋳造型機	43
空気圧縮機等	1,613	合 計	3,509
空気圧縮機	534	事業所数	724
送風機	1,079		
土石用破碎機等	24		
破碎機	15		
摩砕機	4		
ふるい	5		

埼玉県生活環境保全条例に
係る指定騒音施設届出件数

(平成26年3月31日現在)

指定騒音施設の種類	届出件数
木材加工機械	438
合成樹脂用粉碎機	89
ペレタイザー	39
コルゲートマシン	3
シェイクアウトマシン	13
ダイカスト機	80
冷却塔	306
合 計	968
事業所数	331

埼玉県生活環境保全条例に
係る指定騒音作業届出件数

(平成26年3月31日現在)

指定騒音作業の種類	届出件数
業として金属板のつち打加工を行う作業	27
業としてハンドグラインダーを使用する作業	201
業として電気のこぎり 又は電気かんなを使用する作業	23
合 計	251
事業所数	221

振動規制法に係る特定施設届出件数

(平成26年3月31日現在)

特定施設の種類	届出件数	特定施設の種類	届出件数
金属加工機械	1,122	建設用資材製造機械	4
液圧プレス	217	柱製造機械	4
機械プレス	717	印刷機械	250
せん断機	182	ロール機	36
鍛造機	6	ゴム練用	16
圧縮機	468	合成樹脂練用	20
土石用破碎機等	14	合成樹脂用射出成形機	277
破碎機	8	鋳造型機	43
摩碎機	4	合 計	2,214
ふるい	2	事業所数	483

埼玉県生活環境保全条例に係る指定振動施設届出件数

(平成26年3月31日現在)

指定振動施設の種類	届出件数
シェイクアウトマシン	16
オシレイティングコンベア	22
合 計	38
事業所数	15

3 特定建設作業

特定建設作業は、建設作業の中でも著しく騒音*や振動*を発生させる作業で、近隣住民から苦情が寄せられることがあります。この作業を実施する者には「騒音規制法」、「振動規制法」に基づき、届出が義務付けられています。騒音に関してはさく岩機を使用する作業、振動に関してはブレーカーを使用する作業が、届出の大部分を占めています。

上記法令に基づく届出の際、周辺的生活環境を保全するため、防音・防振の対策や近隣住民への事前説明を行うよう指導を行っています。

騒音規制法に係る特定建設作業実施届出件数

特定建設作業の種類	年度				
	2 1	2 2	2 3	2 4	2 5
くい打機、くい抜機、くい打くい抜機を使用する作業	1	2	0 (0)	4	2
びょう打機を使用する作業	0	0	0 (0)	0	0
さく岩機を使用する作業	117	111	127 (11)	124	107
空気圧縮機を使用する作業	7	5	7 (5)	10	12
コンクリートプラント又はアスファルトプラントを設けて行う作業	0	0	0 (0)	0	0
バックホウを使用する作業	0	1	0 (0)	0	0
トラクターショベルを使用する作業	0	0	0 (0)	0	0
ブルドーザーを使用する作業	0	0	0 (0)	0	0
合 計	125	119	134 (16)	138	121

振動規制法に係る特定建設作業実施届出件数

特定建設作業の種類	年度				
	2 1	2 2	2 3	2 4	2 5
くい打機、くい抜機、くい打くい抜機を使用する作業	1	3	0 (0)	4	2
鋼球を使用して建築物等を破壊する作業	0	0	0 (0)	0	0
舗装版破碎機を使用する作業	0	0	0 (0)	0	0
ブレーカーを使用する作業	74	68	87 (7)	77	76
合 計	75	71	87 (7)	81	78

4 深夜営業

飲食店等からの夜間の営業騒音および深夜の音響機器の使用は、「埼玉県生活環境保全条例*」に基づき、規制されています。

本市では、飲食店等が音響機器を設置する場合、事前に現場確認を行い規制基準を遵守するよう指導し、騒音*の防止に努めています。

深夜営業騒音に係る事前指導件数

項目	年度				
	2 1	2 2	2 3	2 4	2 5
指導件数	68	60	81 (1)	67	76

※ このページの表中、()内の数字は合併前に鳩ヶ谷市で受付けた件数(外数)である

第6節 悪臭

本市では、「悪臭防止法」に基づき、複合臭や特定悪臭物質（アンモニア等 22 物質）以外の臭いにも幅広く対応するため、人の嗅覚を用いて臭いを判定する、臭気指数*による規制を行っています。

規制基準を適用する地域

区 分	地 域
第 1 地域	第一種低層住居専用地域、第二種低層住居専用地域、第一種中高層住居専用地域、第二種中高層住居専用地域、第一種住居地域、第二種住居地域、準住居地域、近隣商業地域、商業地域、準工業地域及び用途地域として定められていない地域
第 2 地域	工業地域及び工業専用地域

規制基準

	第 1 地域	第 2 地域
敷地境界	臭気指数 15	臭気指数 18
気体排出口	悪臭防止法施行規則第 6 条の 2 に定める換算式により算出します	
排水	臭気指数 31	臭気指数 34

第7節 公害苦情の現況

公害に関する苦情は、市民生活に係る身近な問題が多く、これらの苦情に対応するため市民からの相談や申立てにより、必要な調査・指導を行い、適切な処理に努めています。

1 種類別発生状況

苦情を種類別に見ると騒音*に関するものが122件と最も多く、次いで大気汚染*59件、振動*25件、悪臭*24件となっており、この4種類で全体の96%を占めています。

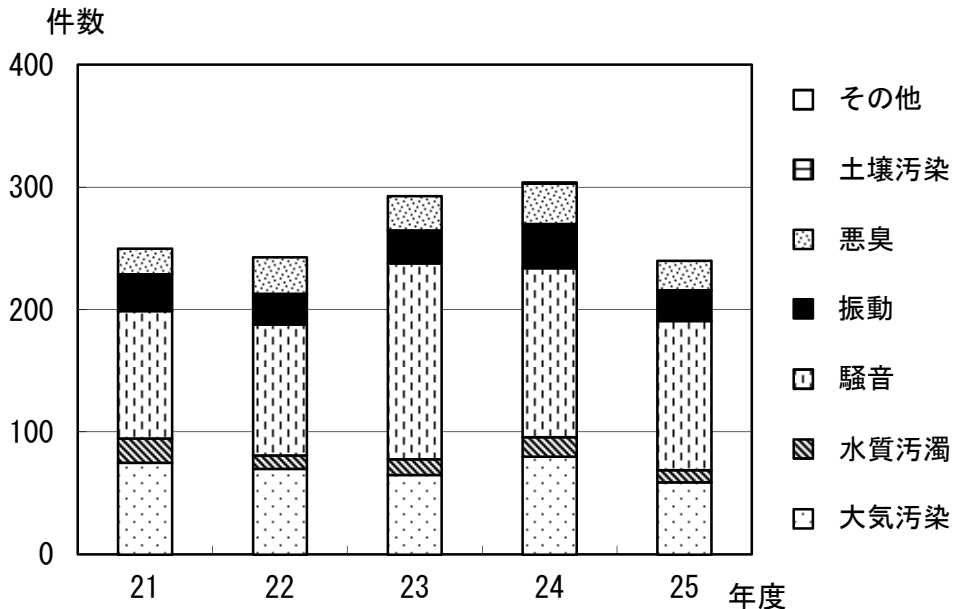
苦情件数の経年変化

年度	大気汚染			水質汚濁	騒音			振動	悪臭	土壌汚染	その他	合計
	ばい煙	粉じん	小計		騒音	深夜騒音	小計					
21	65	10	75	20	95	9	104	30	21	0	0	250
22	61	9	70	11	94	13	107	25	30	0	0	243
23	59 (3)	6 (0)	65 (3)	13 (2)	150 (5)	10 (0)	160 (5)	27 (1)	28 (4)	0 (0)	0 (0)	293 (15)
24	68	12	80	16	119	19	138	36	33	0	1	304
25	51	8	59	10	106	16	122	25	24	0	0	240

※ () 内の数字は合併前に鳩ヶ谷市で受付けた件数(外数)である

※ 「粉じん」には、特定粉じん(アスベスト)に係る苦情件数を含む(相談件数は除く)

種類別苦情件数の推移



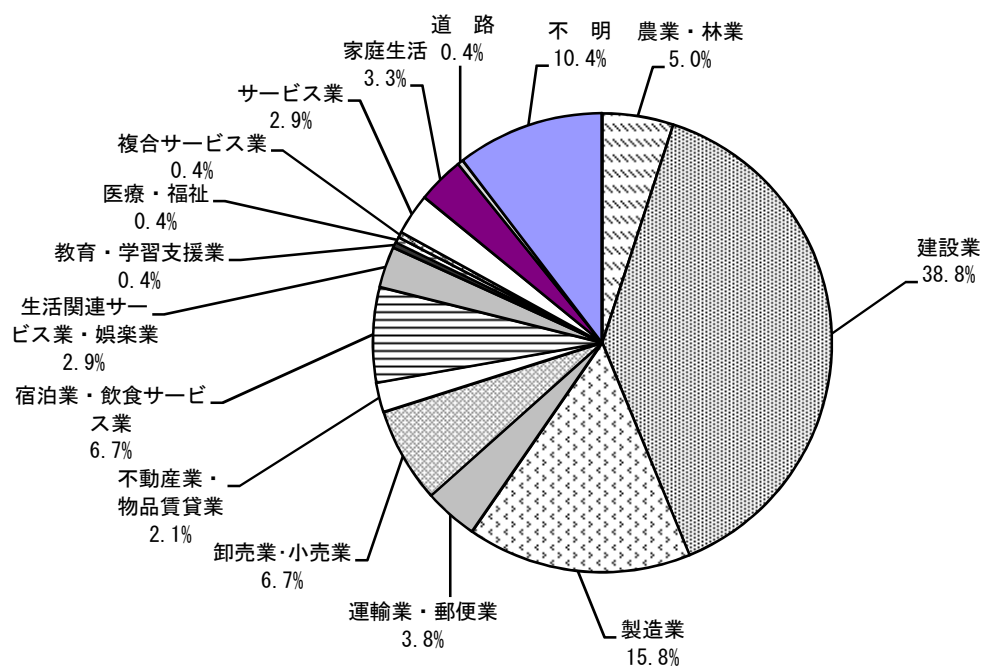
2 発生源別発生状況

苦情を発生源別に見ると、建設業、製造業に関する苦情が多く、この2業種で131件となり、54.6%を占めています。

平成25年度 発生源別苦情件数

種類	発生源	農業・林業	建設業	製造業	運輸業・郵便業	卸売業・小売業	不動産業・物品賃貸業	宿泊業・飲食サービス業	生活関連サービス業・娯楽業	教育・学習支援業	医療・福祉	複合サービス業	サービス業	家庭生活	道路	不明	合計
大気汚染		12	18	9	2	1	1	0	4	0	0	0	3	6	0	3	59
水質汚濁		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10
騒音		0	52	23	7	14	3	15	3	1	0	1	3	0	0	0	122
振動		0	22	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	25
悪臭		0	1	6	0	1	0	1	0	0	1	0	0	2	0	12	24
土壌汚染		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		12	93	38	9	16	5	16	7	1	1	1	7	8	1	25	240

H25年度 発生源別苦情割合



※ 割合 (%) は四捨五入して表記しているため、合計が100%にならないことがある

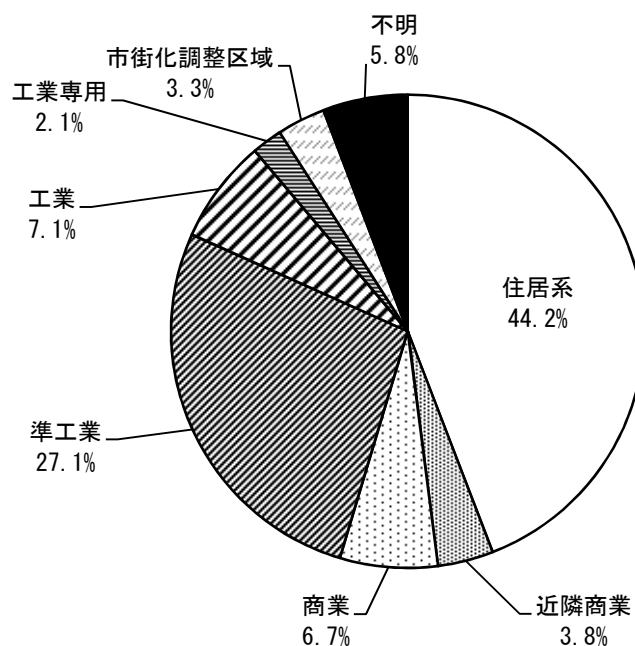
3 用途地域別発生状況

苦情を用途地域別に見ると、住居系 106 件（44.2%）、次いで工業系の内でも準工業地域が 65 件（27.1%）となっています。

平成 25 年度 用途地域別苦情件数

種類	用途地域	住居系	商業系		工業系			市街化調整区域	不明	合計
			近隣商業	商業	準工業	工業	工業専用			
大気汚染	ばい煙	34	2	0	6	5	1	3	0	51
	粉じん	2	1	0	5	0	0	0	0	8
	小計	36	3	0	11	5	1	3	0	59
水質汚濁		3	0	0	0	0	1	0	6	10
騒音	騒音	35	3	12	39	10	1	4	2	106
	深夜騒音	6	2	3	5	0	0	0	0	16
	小計	41	5	15	44	10	1	4	2	122
振動		15	0	1	6	0	2	1	0	25
悪臭		11	1	0	4	2	0	0	6	24
土壌汚染		0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		106	9	16	65	17	5	8	14	240

H 25 年度 用途地域別苦情割合



※ 割合 (%) は四捨五入して表記しているため、合計が 100%にならないことがある

第8節 その他

1 協議会関係

(1) 綾瀬川浄化対策協議会

綾瀬川の浄化を目的に、下流域の足立区、葛飾区、川口市、越谷市、草加市、八潮市の2区4市が、広域的な対策の探求と、その推進について相互の協力を図っています。

なお、平成25年度は、水質調査、生物調査、研修会および視察会を行いました。

(2) 武蔵野線公害対策連絡協議会

東京都・埼玉県の武蔵野線沿線（吉川市を除く）の13市で構成される協議会です。関係機関と共に武蔵野線沿線公害に関する情報を集約し、環境保全を推進するものです。

平成25年度は、東日本旅客鉄道株式会社および日本貨物鉄道株式会社への要望提出や各自治体間での情報交換を行いました。

2 あき地の環境保全

あき地に繁茂した雑草は、害虫の発生源となるだけでなく、不法投棄や防犯上の問題があり、近隣の生活環境を阻害します。

本市では「川口市あき地の環境保全に関する条例」に基づき、あき地の所有者に対し、雑草の除去等の適正な管理を促しています。

また、所有者自身からの申込により、有償にて処理を委託できる制度があります。

なお、市民の身近な生活環境の保全に関する意識の向上を図るため、所有者に対し、適正な管理を行うよう広報紙等による啓発を行っています。

平成25年度 雑草の除去指導状況

	件数	面積 (m ²)
自己処理	75	27,662
委託処理	84	12,658
未処理	20	4,807
指導合計	179	45,127

資料編

I 行政年表

昭和

- 37. 6. 6 「埼玉県公害防止条例」制定
- 42. 8. 3 「公害対策基本法」制定
- 43. 6. 10 「大気汚染防止法*」ならびに「騒音規制法」制定
- 43. 12. 26 「川口市あき地の環境保全に関する条例」制定
- 45. 4. 1 「川口市公害防止資金融資及び利子助成に関する条例」制定
- 45. 7. 18 市内に初の光化学スモッグ発生
- 45. 7. 25 光化学スモッグによる初の被害者発生
- 45. 7. 31 「埼玉県光化学スモッグ暫定対策要綱」制定
- 45. 10. 15 公害部設置（交通災害対策課・公害調査課・公害対策課の3課）
- 45. 12. 25 「水質汚濁防止法*」制定
- 45. 12. 25 「農用地の土壌の汚染防止等に関する法律」制定
- 46. 4. 1 「川口市公害対策審議会設置条例」制定
- 46. 4. 1 大気汚染常時監視測定局を3カ所に設置
（市民会館・消防本部：現 南消防署・南平柳分署：現 南平分署）
- 46. 6. 1 「悪臭防止法」制定
- 46. 7. 1 公害検査室設置、水質分析を開始
- 46. 10. 1 「大気汚染防止法*」に基づく事務移譲（工場以外）
- 47. 3. 31 測定局の移設と2カ所新設（中央・横曽根・南平・新郷・芝）
- 47. 6. 10 「埼玉県大気汚染緊急時対策要綱」制定
- 47. 10. 1 組織改正により公害部2課（公害調査課・公害対策課）となる
- 48. 4. 1 自動車排出ガス測定局*として本町測定局（中央公民館：現 文化財センター）を設置
- 49. 5. 1 「水質汚濁防止法」に基づく事務移譲
- 50. 4. 7 公害検査室を公害分析センターに改称
（各担当課で行っていた分析業務を一本化する）
- 51. 6. 10 「振動規制法」制定
- 54. 1. 20 南平測定局を南平公民館から元郷中学校に移設
- 56. 6. 1 「埼玉県環境影響評価に関する指導要綱」施行
- 57. 4. 1 公害部と衛生部が統合、環境部となる
- 61. 4. 1 公害調査課と公害対策課が統合し、公害課となる
- 62. 9. 1 芝測定局を芝支所から樋ノ爪児童公園に移設
- 62. 9. 1 自動車排出ガス測定局*として安行測定局を慈林小学校内に設置

平成

- 2. 3. 1 南平測定局を元郷中学校から領家第一公園に移設
- 3. 9.14 地球環境問題を公害課で所管する
- 3.12.25 自動車排出ガス測定局*として、神根測定局を乙女山住宅地内に、芝第二測定局を芝西小学校校内に設置
- 5.11.19 「環境基本法*」公布・施行
- 6. 8. 1 「川口市公害対策審議会」を「川口市環境審議会」に改称
- 7. 4. 1 組織改正により環境保全課となる
- 7. 4. 1 「埼玉県環境基本条例」施行
- 9.12. 1 「大気汚染防止法*施行令」が一部改正され、有害大気汚染物質対策にダイオキシン類*を指定、施行
- 10. 9.28 「川口市環境基本条例*」公布
- 11. 4. 1 「埼玉県公害防止条例」が一部改正され、小型焼却炉の規制が強化される
- 11. 4. 1 「川口市環境基本条例」が施行
- 11.10. 1 「環境マネジメントシステム*」が運用開始される
- 12. 1.15 「ダイオキシン類対策特別措置法*」が施行
- 12. 2.23 「環境マネジメントシステム*」が審査登録される
- 13. 3. 1 「川口市環境基本計画」が策定される
- 13. 4. 1 特例市へ移行する（騒音*・振動*・悪臭*の一部権限移譲）
- 13. 4. 1 「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」が施行される
- 14. 2. 7 「川口市地球温暖化対策実行計画」が策定される
- 14. 4. 1 「埼玉県生活環境保全条例*」が施行される
- 14. 4. 1 「大気汚染防止法」の工場規制事務ほか13事務が移譲される
- 14. 4. 1 組織改正により、地球環境問題を環境総務課に移管
- 14. 4. 1 「彩の国中核都市」の指定を受ける
- 14. 8. 7 「川口市環境物品*等の調達に関する方針」が制定される
- 15. 2.15 「土壌汚染対策法」が施行
- 16. 3.19 環境マネジメントシステム*適用範囲を拡大登録
- 16. 4. 1 地下水採取に関する業務及び特定化学物質の適正管理業務が移譲される
- 18. 3. 1 「大気汚染防止法」が一部改正され、アスベスト*関連の規制が強化される
- 18. 4. 1 「大気汚染防止法」が一部改正され、揮発性有機化合物*の排出規制が施行
- 18. 4. 1 本町測定局を廃止
- 18.10. 1 「悪臭防止法」に基づく規制方式を、濃度規制から臭気指数*規制に変更
- 19. 3. 1 「川口市地球温暖化対策地域推進計画」が策定される
- 19. 8.21 「第二次川口市地球温暖化対策実行計画」が策定される
- 20. 3. 6 「川口市環境基本計画」が改訂される

- 21. 3. 9 「川口市環境学習指針」が策定される
- 22. 4. 1 「土壌汚染対策法」が一部改正され、土壌の汚染状況の把握のための制度の拡充、規制対象区域の措置の内容の明確化等が図られ施行される
- 23. 3. 31 「第2次川口市環境基本計画」が策定される
- 23. 4. 1 中央測定局及び芝第二測定局を廃止
- 23. 9. 22 「川口市地球高温化対策実行計画（区域施策編）」が策定される
- 23. 9. 22 「第3次川口市地球高温化対策実行計画（事務事業編）」が策定される
- 23. 10. 11 鳩ヶ谷市と合併
- 24. 2. 23 微小粒子状物質（PM_{2.5}）*の常時監視を開始
- 24. 6. 1 「水質汚濁防止法」が一部改正され、地下水汚染の未然防止に係る規制が強化される
- 24. 6. 1 「大気汚染防止法」が一部改正され、ばい煙の排出基準超過事業場に対する規制が強化される
- 25. 3. 9 微小粒子状物質（PM_{2.5}）の注意喚起の判断について、本市独自の基準を運用開始
- 25. 4. 1 組織改正により地球高温化対策室を設置
- 25. 4. 1 「かわぐちグリーン・エネルギー戦略」の運用開始
- 25. 11. 1 微小粒子状物質（PM_{2.5}）の注意喚起の判断を、埼玉県の予測体制に一本化
- 26. 1. 23 微小粒子状物質（PM_{2.5}）の成分分析を開始

Ⅱ 関係条例等

1 川口市環境基本条例

平成10年 9月28日
条例第58号

目次

- 第1章 総則（第1条—第7条）
- 第2章 環境の保全等に関する基本的施策等
 - 第1節 施策の策定等に当たっての環境への配慮（第8条）
 - 第2節 環境基本計画（第9条）
 - 第3節 市が講ずる環境の保全等のための施策等（第10条—第20条）
 - 第4節 地球環境保全の推進（第21条）

附則

第1章 総則

（目的）

第1条 この条例は、市、事業者及び市民が適正な役割分担と協働のもとに、環境の保全及び創造（以下「環境の保全等」という。）に取り組むための基本理念を定め、並びに市、事業者及び市民の責務を明らかにするとともに、環境の保全等に関する施策の基本となる事項を定めることにより、環境の保全等に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、もって現在及び将来の市民の健康で文化的な生活の確保に寄与することを目的とする。

（定義）

第2条 この条例において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

- (1) 環境への負荷 人の活動により環境に加えられる影響であって、環境の保全上の支障の原因となるおそれのあるものをいう。
- (2) 地球環境保全 人の活動による地球全体の温暖化又はオゾン層の破壊の進行、海洋の汚染、野生生物の種の減少その他の地球の全体又はその広範な部分の環境に影響を及ぼす事態に係る環境の保全であって、人類の福祉に貢献するとともに市民の健康で文化的な生活の確保に寄与するものをいう。
- (3) 公害 環境の保全上の支障のうち、事業活動その他の人の活動に伴って生ずる相当範囲にわたる大気汚染、水質汚濁（水質以外の水の状態又は水底の底質が悪化することを含む。）、土壌汚染、騒音、振動、地盤沈下（鉱物の掘採のための土地の掘削によるものを除く。）及び悪臭によって、人の健康又は生活環境（人の生活に密接な関係のある財産並びに人の生活に密接な関係のある動植物及びその生育環境を含む。）に係る被害が生ずることをいう。

（基本理念）

第3条 環境の保全等は、市民が健康で文化的な生活を営む上で必要となる良好な環境を確保するとともに、これを将来の世代へ継承していくことを目的として行われなければならない。

- 2 環境の保全等は、環境資源の有限性を認識し、その適正な管理及び利用を図り、環境への負荷の少ない持続的な発展が可能な社会を構築することを目的として、すべての者が適正な役割分担のもと、自主的かつ積極的に行われなければならない。
- 3 地球環境保全は、人類共通の課題であるとともに、市民の健康で文化的な生活を将来にわたって確保する上で重要な課題であることにかんがみ、すべての事業活動及び日常生活において積極的に推進されなければならない。

（市の責務）

第4条 市は、前条に定める環境の保全等についての基本理念（以下「基本理念」という。）にのっとり、環境の保全等に関する基本的かつ総合的な施策を策定し、及び実施する責務を有する。

- 2 市は、前項の施策のうち、広域的な取組を必要とするものを策定し、及び実施するに当たっては、国及び他の地方公共団体と協力してその施策の推進に努めなければならない。

(事業者の責務)

第5条 事業者は、基本理念にのっとり、事業活動を行うに当たっては、これに伴って生ずる公害を防止し、及び廃棄物を適正に処理し、並びに自然環境の適正な保全を図る責務を有する。

2 事業者は、基本理念にのっとり、物の製造、加工又は販売その他の事業活動を行うに当たって、その事業活動に係る製品その他の物が廃棄物となった場合にその適正な処理が図られることとなるように必要な措置を講ずる責務を有する。

3 前2項に定めるもののほか、事業者は、基本理念にのっとり、その事業活動に係る製品その他の物が使用され、又は廃棄されることによる環境への負荷の低減に資するように努めるとともに、その事業活動において、再生資源その他環境への負荷の低減に資する原材料、役務等を利用するように努めなければならない。

4 前3項に定めるもののほか、事業者は、基本理念にのっとり、その事業活動に関し、環境の保全等に自ら努めるとともに、市が実施する環境の保全等に関する施策に協力する責務を有する。

(市民の責務)

第6条 市民は、基本理念にのっとり、環境の保全上の支障を防止するため、その日常生活に伴う環境への負荷の低減に努めなければならない。

2 前項に定めるもののほか、市民は、基本理念にのっとり、環境の保全等に自ら努めるとともに、市が実施する環境の保全等に関する施策に協力する責務を有する。

(報告書)

第7条 市長は、定期的に、環境の状況及び市が環境の保全等に関して講じた施策に関する報告書を作成し、これを公表するものとする。

第2章 環境の保全等に関する基本的施策等

第1節 施策の策定等に当たっての環境への配慮

(施策の策定等に当たっての環境への配慮)

第8条 市は、環境との共生を図るため、施策の策定及び実施に当たっては、環境への負荷の低減その他の環境の保全等について極力配慮するものとする。

第2節 環境基本計画

(環境基本計画)

第9条 市長は、環境の保全等に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、川口市環境基本計画（以下「環境基本計画」という。）を定めるものとする。

2 環境基本計画は、次に掲げる事項について定めるものとする。

(1) 環境の保全等に関する長期的な目標及び総合的な施策の大綱

(2) 前号に掲げるもののほか、環境の保全等に関する施策を総合的かつ計画的に推進するために必要な事項

3 市長は、環境基本計画を定めるに当たっては、事業者及び市民の意見を反映させるための必要な措置を講ずるとともに、川口市環境審議会の意見を聴かななければならない。

4 市長は、環境基本計画を定めたときは、速やかにこれを公表するものとする。

5 前2項の規定は、環境基本計画の変更について準用する。

第3節 市が講ずる環境の保全等のための施策等

(環境基本計画との整合)

第10条 市は、環境に影響を及ぼすと認められる施策を策定し、又は実施するに当たっては、環境基本計画との整合を図るようにするものとする。

(環境影響評価の措置)

第11条 市は、環境に著しい影響を及ぼすおそれのある事業を行う事業者が、その事業の実施前に環境に及ぼす影響について事前に評価し、その結果に基づき、その事業に係る環境への影響について適正に配慮することを推進するため、必要な措置を講ずるように努めるものとする。

(助成措置)

第12条 市は、事業者又は市民が環境への負荷の低減のための施設の整備その他の環境の保全等のための適切な措置をとることを助長するため、必要かつ適正な助成を行うために必要な措置を講ずるように努めるものとする。

(自然環境の保全及び創造)

第13条 市は、緑地、水辺等における多様な自然環境の適正な保全及び創造に努めるものとする。

2 市は、自然環境の適正な保全及び創造を行うに当たっては、動植物の生育環境等に配慮することにより、生態系の多様性の確保に努めるものとする。

(循環を基調とする社会の構築)

第14条 市は、環境への負荷の少ない循環を基調とする社会の構築を促進するため、事業者及び市民による資源等の循環的な利用、エネルギーの有効利用及び廃棄物の減量が促進されるように必要な措置を講ずるものとする。

2 市は、再生資源その他の環境への負荷の低減に資する原材料、製品、役務、エネルギー等の利用が促進されるように必要な措置を講ずるものとする。

3 市は、環境への負荷の少ない循環を基調とする社会の構築を促進するため、市の施設の建設及び維持管理その他の事業の実施に当たって、資源等の循環的な利用、エネルギーの有効利用及び廃棄物の減量に努めるものとする。

(環境教育及び環境学習の振興等)

第15条 市は、環境の保全等に関する教育及び学習の振興並びに広報活動の充実により、事業者及び市民が環境の保全等についての理解を深められるようにするとともに、これらの者の環境の保全等に関する活動を行う意欲が増進されるようにするため、必要な措置を講ずるものとする。

(民間団体等の環境保全活動の促進)

第16条 市は、事業者、市民又はこれらの者の組織する民間の団体（以下「民間団体等」という。）が自発的に行う環境の保全等に関する活動が促進されるように必要な措置を講ずるものとする。

(情報の提供)

第17条 市は、環境の保全等に関する教育及び学習の振興並びに民間団体等の活動の促進に資するため、個人及び法人の権利利益の保護に配慮しつつ、環境の状況その他の環境の保全等に関する必要な情報を適切に提供するように努めるものとする。

(事業者、市民等の意見の反映)

第18条 市は、環境の保全等に関する施策に、事業者、市民等の意見を反映することができるように、必要な措置を講ずるものとする。

(情報の収集及び監視等の体制の整備)

第19条 市は、環境の保全等に関する施策を適正に推進するため、情報の収集に努めるものとする。

2 市は、環境の状況を的確に把握し、及び環境の保全等に関する施策を適正に実施するために必要な監視、測定及び検査の体制の整備に努めるものとする。

(総合調整のための体制の整備)

第20条 市は、環境の保全等に関する施策について総合的に調整し、及び推進するために必要な体制を整備するものとする。

第4節 地球環境保全の推進

(地球環境保全の推進)

第21条 市は、地球環境保全に資する施策を積極的に推進するものとする。

2 市は、国等と連携し、又は市の実施する各種の国際交流を通して、環境の保全等に関する国際協力の推進に努めるものとする。

附 則

この条例は、平成11年4月1日から施行する。

2 川口市環境審議会条例

昭和46年 4月 1日
条例第21号

(設置)

第1条 環境基本法(平成5年法律第91号)第44条の規定に基づき、川口市環境審議会(以下「審議会」という。)を置く。

(平成6条例27・平成13条例18・一部改正)

(所掌事務)

第2条 審議会は、市長の諮問に応じ、環境保全に関する事項を調査審議し、及びこれらについて必要と認める事項を市長に建議する。

(平成6条例27・一部改正)

(組織)

第3条 審議会は、委員15人以内をもって組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから市長が委嘱する。

- (1) 知識経験者
- (2) 民間団体の代表者
- (3) 業界関係者
- (4) 関係行政機関の職員

(昭和46条例50・昭和53条例60・平成6条例27・平成10条例20・一部改正)

(任期)

第4条 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長及び副会長)

第5条 審議会に、会長及び副会長を置き、委員の互選により定める。

2 会長は、審議会を代表し、会務を総理する。

3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

(会議)

第6条 会長は、審議会の会議を招集し、その議長となる。

2 審議会は、委員の半数以上が出席しなければ、会議を開くことができない。

3 審議会の議事は、出席委員の過半数をもってこれを決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

4 審議会が、特に必要があると認めるときは、関係者の出席又は資料の提出を求めることができる。

(昭和53条例60・平成6条例27・一部改正)

(部会)

第7条 審議会は、特別の事項を調査審議するため必要があるときは、部会を置くことができる。

2 部会は、審議会の委員のうちから会長が指名する者及び次条の規定により特別委員を置く場合には特別委員をもって組織する。

3 部会に、部会長及び副部会長を置き、部会に属する委員の互選により定める。

4 部会長は、部会の会務を総理し、部会における審議の状況及び結果を審議会に報告するものとする。

5 副部会長は、部会長を補佐し、部会長に事故があるときは、その職務を代理する。

6 部会が、特に必要があると認めるときは、関係者の出席又は資料の提出を求めることができる。

(平成13条例18・追加)

(特別委員)

第8条 部会に、特別の事項を調査審議させるため、特別委員を置くことができる。

2 特別委員は、当該特別の事項について専門的知識を有する者及び関係行政機関の職員のうちから市長が委嘱する。

3 特別委員は、当該特別の事項に関する調査審議が終了したときに、解任されるものとする。

(平成13条例18・追加)

(幹事)

第9条 審議会に幹事若干人を置き、市長が市職員のうちから任命する。

2 幹事は、審議会の所掌事務について会長、副会長及び委員を補佐する。

(昭和53条例60・全改、平成13条例18・旧第7条線下)

(庶務)

第10条 審議会の庶務は、環境部において処理する。

(昭和53条例60・昭和57条例1・一部改正、平成13条例18・旧第8条繰下)

(委任)

第11条 この条例に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、市長が別に定める。

(平成13条例18・旧第9条繰下)

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和46年11月1日条例第50号)

この条例は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和53年3月30日条例第60号)

この条例は、昭和53年4月1日から施行する。

附 則 (昭和57年3月27日条例第1号) 抄

(施行期日)

1 この条例は、昭和57年4月1日から施行する。

附 則 (平成6年6月27日条例第27号)

(施行期日)

1 この条例は、平成6年8月1日から施行する。

(川口市非常勤の特別職職員の報酬及び費用弁償に関する条例の一部改正)

2 川口市非常勤の特別職職員の報酬及び費用弁償に関する条例(昭和53年条例第9号)の一部を次のように改める。

[次のよう] 略

附 則 (平成10年3月24日条例第20号)

この条例は、平成10年4月1日から施行する。

附 則 (平成13年3月26日条例第18号)

この条例は、平成13年4月1日から施行する。

3 川口市あき地の環境保全に関する条例

昭和43年12月26日
条例第51号

(目的)

第1条 この条例は、雑草が繁茂したままで放置され、若しくは残土等の置場として使用され、又は沼地化したままで放置されている等良好な状態で維持管理されていないあき地が、火災若しくは犯罪の発生等市民の生活環境を害していることにかんがみ、これらのあき地を整備し、清潔な生活環境を保持することによって、市民の生活の安定と公共の福祉に寄与することを目的とする。

(昭和45条例49・全改)

(定義)

第2条 この条例において「不良状態」とは、あき地に雑草が繁茂し、若しくは汚物が投棄され、又はあき地が残土等の置場として使用され、若しくは沼地と化し、これらをそのままにしておくときは、火災若しくは犯罪の発生又は非衛生の原因となり、市民の健康と生活環境を著しく阻害するような状態をいう。

(昭和45条例49・全改)

(所有者等の責務)

第3条 あき地の所有者又は管理者は、当該あき地が不良状態にならないように維持管理しなければならない。

(市長の指導助言)

第4条 市長は、あき地が不良状態になるおそれがあるとき、又は不良状態にあるときは、雑草の除去等あき地の整備の措置について必要な指導または助言をすることができる。

(昭和45条例49・一部改正)

(勧告)

第5条 市長は、前条に定める指導助言を履行しない者があるときは、当該あき地の所有者または管理者に対し、雑草の除去等あき地の整備について必要な措置を勧告することができる。

(昭和45条例49・一部改正)

(あき地の活用)

第6条 あき地の所有者または管理者は、公共の福祉のため、当該あき地を活用するよう努めるものとする。

(委任)

第7条 この条例に定めるもののほか、必要な事項は、市長が別に定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和45年10月15日条例第49号)

この条例は、公布の日から施行する。

4 川口市あき地の環境保全に関する条例施行規則

昭和43年12月26日
規則第46号

(目的)

第1条 この規則は、川口市あき地の環境保全に関する条例（昭和43年条例第51号。以下「条例」という。）の施行について必要な事項を定めることを目的とする。

(除去等の委託申し込み)

第2条 雑草が繁茂したまま放置されているあき地の不良状態を除去し、整備することができないときは、当該あき地の所有者又は管理者は、その業務を市長に委託することができる。

2 前項の規定により雑草の除草業務を委託しようとするときは、雑草除去等業務委託申請書（様式第1号）を市長に提出しなければならない。

（昭和45規則45・全改、昭和54規則26・一部改正）

(委託費)

第3条 前条の規定による除去等の委託費は、実費とする。ただし、市長が特別の事由があると認めるときは、これを免除することができる。

(納期)

第4条 前条本文の委託費は、除去等の作業開始までに前納しなければならない。ただし、特別の事由があるときは、このかぎりでない。

(勧告書)

第5条 条例第5条による勧告は、雑草等除去勧告書（様式第2号）、残土等置場整備勧告書（様式第3号）又は沼地整備勧告書（様式第4号）により行なうものとする。

（昭和45規則45・一部改正）

(活用の方法)

第6条 条例第6条によるあき地の活用とは、子供の遊び場その他公共の利用に供することをいう。

（昭和61規則1・全改）

(あき地の公共利用)

第7条 市長は、あき地の所有者又は管理者から、前条の公共利用の目的のため、あき地の利用提供の申し出があったときは、次の基準により当該あき地を借り受け、公共の利用に供するものとする。

- (1) 当該あき地の周辺に、公園、子供の遊び場等がなく、かつ、環境的に適当地と認められること。
- (2) 当該あき地の周辺に住居が多く、施設の利用度が高いことが認められること。
- (3) 当該あき地が、利用目的に適するように整地されていること。
- (4) 借り受けるあき地の使用貸借契約期間は、原則として5年とすること。

（昭和48規則38・全改）

(立札の掲出)

第8条 市長は、前条の規定によりあき地を借り受けたときは、そのあき地に公共の利用に供する旨の立札を掲出するものとする。

（昭和48規則38・追加）

(あき地の返還)

第9条 市長は、借り受けたあき地の所有者又は管理者から、特にやむを得ない理由により当該あき地の返還の申し出があったときは、すみやかに返還するものとする。

(昭和48規則38・追加)

附 則

この規則は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和45年10月15日規則第45号)

この規則は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和47年12月1日規則第53号)

この規則は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和48年12月10日規則第38号)

この規則は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和55年5月30日規則第26号)

この規則は、昭和54年6月1日から施行する。

附 則 (昭和61年1月29日規則第1号)

この規則は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和63年3月28日規則第19号)

(施行期日)

1 この規則は、昭和63年4月1日から施行する。

(経過措置)

2 この規則施行の際、この規則による改正前の各規則に基づき、既に印刷済みの帳票については、当分の間、使用できるものとする。

3 前項の場合において、この規則により押印欄を廃止されたものについては、押印を省略することができる。

附 則 (平成13年9月27日規則第77号) 抄

(施行期日)

1 この規則は、公布の日から施行する。

(経過措置)

3 この規則の施行の際、川口市規則に規定する様式に基づき、既に印刷済みの帳票については、当分の間、所要の調整をして使用することができる。

附 則 (平成19年3月30日規則第55号)

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

(様式については省略)

5 川口市浄化槽法施行細則

平成14年 3月29日

規則第52号

(趣旨)

第1条 この規則は、法令に定めるもののほか、浄化槽法（昭和58年法律第43号。以下「法」という。）の施行に関し必要な事項を定めるものとする。

(浄化槽の設置の届出の添付書類)

第2条 法第5条第1項の規定により浄化槽の設置の届出をする場合には、川口市建築基準法施行細則（昭和55年規則第21号）第8条第1項第3号に規定する調書を添付しなければならない。

(浄化槽の使用開始等の報告書の様式)

第3条 法の規定に基づき市長に提出する報告書は、次の各号に掲げる区分に応じ当該各号に定める報告書とする。

- (1) 法第10条の2第1項に規定する浄化槽の使用開始の報告書 様式第1号の報告書
- (2) 法第10条の2第2項に規定する技術管理者の変更の報告書 様式第2号の報告書
- (3) 法第10条の2第3項に規定する浄化槽管理者の変更の報告書 様式第3号の報告書

(提出部数)

第4条 法第5条第1項の規定により市長に提出する届出書の提出部数は、正本1通及び副本2通とする。

2 法第5条第1項の規定により特定行政庁に提出する届出書の提出部数は、正本1通とする。

3 法第10条の2第1項から第3項までの規定により市長に提出する報告書の提出部数は、正本1通及び副本2通とする。

附 則

この規則は、平成14年4月1日から施行する。

(様式については省略)

6 川口市浄化槽設置整備事業補助金交付要綱

(趣旨)

第1条 この要綱は、川口市補助金等交付規則（昭和50年規則第24号）第15条に基づき生活排水による公共用水域の水質汚濁を防止するため、浄化槽、変則浄化槽、高度処理型浄化槽、高度処理型変則浄化槽（以下「浄化槽等」という。）の設置、又は既存単独処理浄化槽、若しくは汲み取り便所から浄化槽等への転換をしようとする者に対し補助金を交付することについて、必要な事項を定めるものとする。

(定義)

第2条 この要綱において、次の各号に掲げる用語の定義は、当該各号に定めるところによる。

- (1) 生活排水 し尿、その他生活に起因する排水をいう。
- (2) 雑排水 し尿を除く生活排水をいう。
- (3) 浄化槽 浄化槽法（昭和58年法律第43号以下「法」という。）第4条第1項の規定による構造基準に適合する法第2条第1項の規定する浄化槽であり、かつ、生物化学的酸素要求量（以下「BOD」という。）除去率90パーセント以上、放流水のBOD20mg/L（日間平均値）以下の機能を有するものをいう。
- (4) 既存単独処理浄化槽 浄化槽法の一部を改正する法律（平成12年法律第106号）附則第2条に規定する既存単独処理浄化槽をいう。
- (5) 変則浄化槽 既存単独処理浄化槽と変則合併処理装置（既存単独処理浄化槽の処理水と雑排水とを併せて処理する装置。以下同じ。）とを組み合わせた法第4条第1項の規定による構造基準に適合する法第2条第1号に規定する浄化槽であるとともに、設置にあたり、建築基準法（昭和25年法律第201号）第68条の26の規定に基づく国土交通大臣の構造方式の認定を受けたものをいう。
- (6) 高度処理型浄化槽（BOD除去型） 法第4条第1項の規定による構造基準に適合する法第2条第1号に規定する浄化槽であり、かつ、BOD除去率が97%以上、放流水のBODが5mg/L（日間平均値）以下の機能を有するものをいう。
- (7) 高度処理型変則浄化槽（BOD除去型） 既存単独処理浄化槽と変則合併処理装置とを組み合わせた法第4条第1項の規定による構造基準に適合する法第2条第1号に規定する浄化槽であり、かつ、BOD除去率が97%以上、放流水のBODが5mg/L以下（日間平均値）の機能を有するとともに、設置に当たり、建築基準法第68条の26の規定に基づく国土交通大臣の構造方法の認定を受けたものをいう。
- (8) 公共用水域 河川、湖沼及びこれに接続する公共溝渠、農業用水路その他公共の用に供される水域をいう。

(補助対象地域)

第3条 補助の対象となる地域は、下水道法（昭和33年法律第79号）第4条第1項又は同法第25条の3第1項に基づき策定された区域以外の地域とする。

(補助対象浄化槽等)

第4条 補助金の対象となる浄化槽等は、処理対象人数10人以下のもので、平成4年10月30日付け衛浄第34号厚生省生活衛生局水道環境部環境整備課浄化槽対策室長通知に定める「合併処理浄化槽設置整備事業における国庫補助指針」に適合し、設置済みでないものとする。

2 浄化槽等の設置後は、遅滞なく全ての生活排水を接続し、使用を開始するものとする。

(補助対象者)

第5条 補助金の交付対象となる者（以下「補助対象者」という。）は、市内の、第3条に定める交付対象地域内において住宅（専ら住居の用に供する建物又は延べ床面積の1/2以上を住居の用に供する建物）を建築しようとする者で、浄化槽等を設置、又は既存単独処理浄化槽、若しくは汲み取り便所から浄化槽等へ転換しようとする者。

2 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当する者は、補助対象者としな

- (1) 法第5条第1項に基づく設置の届出をせず、又は建築基準法（昭和25年法律第201号）第6条第1項に基づく確認を受けずに浄化槽等を設置する者。
- (2) 住宅等を借りている者で、賃貸人の承諾が得られない者。
- (3) 販売の目的で建物を建築（増改築を含む。）する者。
- (4) その他市長が補助金を交付することが適当でないとする者。

(補助金額)

第6条 補助金額は、浄化槽等の設置又は転換に要する経費に2分の1を乗じて得た額（その額に千円未満の端数が生じるときは、当該端数を切り捨てた額）と別表1に掲げる人槽区分に応じ同表下欄に定める限度額とを比較していずれか少ない額の範囲内において市長が定める額とする。ただし、予算の範囲で交付する。

2 既存単独処理浄化槽、汲み取り便所からの転換を伴う浄化槽等の設置については、前項の補助金額に単独処理浄化槽、汲み取り便槽の処分費に係る額（60千円を限度額とする。）を加算する。

(補助金の交付申請)

第7条 補助金の交付を受けようとする者（以下「申請者」という。）は、補助金交付申請書（様式第1号）に次に掲げる書類を添付して、市長に提出しなければならない。

- (1) 浄化槽設置届出書の写し又は建築確認通知書の写し
- (2) 設置場所の案内図及び配置図
- (3) し尿浄化槽に関する調書及び浄化槽構造図の写し
- (4) 住宅等を借りている者は、賃貸人の承諾書
- (5) 見積書の写し
- (6) その他市長が必要と認める書類

(交付の決定及び通知)

第8条 市長は、補助金交付申請書の提出があったときは、速やかにその内容を審査し、補助金交付の可否を決定するものとする。

2 市長は、補助金の交付又は不交付の決定をしたときは、申請者に通知するものとする。（様式第2-1号、2-2号）

(変更等の承認申請)

第9条 補助金の交付の決定を受けた者（以下「補助事業者」という。）が申請内容を変更するとき又は補助事業を中止若しくは廃止しようとするときは、その3日前までに事業計画変更（中止・廃止）承認申請書（様式第3-1号）を市長に提出し、その承認を受けなければならない。（様式第3-2号、3-3号）

2 補助事業者は、補助事業が予定の期間内に完了しないとき又は補助事業の遂行が困難となったときは、速やかに市長に報告し、その指示を受けなければならない。

(実績報告)

第10条 補助事業者は、工事完了後30日以内、又は当該年度末のいずれか早い日までに補助事業実績報告書（様式第4号）に次に掲げる書類を添付して、市長に提出しなければならない。

- (1) 浄化槽保守点検業者及び浄化槽清掃業者との業務委託契約書の写し（補助事業者が自ら当該浄化槽の保守点検又は清掃を行うときは、自ら行うことができることを証明する書類）
- (2) 浄化槽法に定める検査依頼書の写し
- (3) 工事施行写真（転換を伴う場合は工事前、工事後の写真）
- (4) 工事費等実施内訳書及び領収書の写し
- (5) その他市長が必要と認める書類

(交付額の確定)

第11条 市長は、前条の規定により提出された補助事業実績報告書を審査し、その報告に係る補助事業の成果が、補助金の交付決定の内容及びこれに付した条件に適合すると認めたときは、補助金の交付額を確定し、補助金確定通知書（様式第5号）により速やかに補助事業者に通知するものとする。

(補助金の交付)

第12条 補助事業者は、前条の規定による補助金確定通知書を受領したときは、補助金交付請求書（様式第6号）を市長に提出しなければならない。

2 市長は、補助金交付請求書に基づき補助金を交付するものとする。

(補助金交付決定の取消)

第13条 市長は、補助事業者が次の各号のいずれかに該当した場合は、補助金交付決定の全部又は一部を取り消すことができる。

- (1) 不正の手段により補助金の交付を受けたとき。
- (2) 補助金を他の用途に使用したとき。
- (3) 補助金交付の条件に違反したとき。

(補助金の返還)

第14条 市長は、補助金の交付決定を取り消した場合において、すでに補助金が交付されているときは、補助金の返還を請求するものとする。

(調査)

第15条 市長は、補助事業の適正を期するため、浄化槽等の設置工事及び既存単独処理浄化槽、若しくは汲み取り便所から浄化槽等への転換工事の状況を施工の現場において調査させることができる。

2 市長は、補助事業により整備された浄化槽の維持管理の適正化を図るため、必要な限度において調査させ、または資料の提出を求めることができる。

(その他)

第16条 この要綱の施行について必要な事項は、市長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成3年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成10年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成12年2月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成17年5月24日から施行する。

附 則

この要綱は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成24年6月1日から施行する。

別表1

人 槽 区 分		5人槽	6人槽	7人槽	8人槽	9人槽	10人槽
設 置	1 浄化槽・変則浄化槽	270千円	320千円		414千円		
	2 高度処理型浄化槽・変則浄化槽 (BOD除去型)	428千円	573千円		791千円		
転 換	3 既存単独処理浄化槽、又は汲み取り 便所からの転換を伴う浄化槽	310千円	360千円		454千円		
	4 既存単独処理浄化槽、又は汲み取り 便所からの転換を伴う高度処理 型浄化槽 (BOD除去型)	428千円	573千円		791千円		

(様式については省略)

Ⅲ 用語解説

「* (アスタリスク)」が付いている語句の解説です。

《あ行》

【アイドリングストップ】

自動車の駐・停車時において不必要なエンジンの使用を停止することをいいます。大気汚染や騒音の防止はもちろん、地球高温化の原因となる二酸化炭素の排出も抑制できません。

【悪臭】

人に不快感を与え、生活環境を損なうおそれのある臭いをいいます。「悪臭防止法」では、人の活動で発生し、周辺的生活環境を損なうおそれのものとして工場・事業場の悪臭に規制等を定めています。

【アスベスト (石綿)】

石綿ともいわれ、天然に存在する繊維状の鉱物です。主成分は、珪酸マグネシウム塩で、蛇紋石石綿と角閃石石綿に大別されます。

アスベストは耐熱・耐磨耗性にすぐれているため、ボイラー暖房パイプの被覆、自動車のブレーキ、建築材など広く利用されていましたが、繊維が肺に突き刺さったりすると肺がんや中皮腫の原因になることが明らかになり、WHO (世界保健機構) ではアスベストを発がん物質と断定しました。

日本においても、「大気汚染防止法」により平成元年に「特定粉じん」に指定され、発生施設や吹付け石綿の除去等の作業が規制されるようになりました。また、平成4年発効の「バーゼル条約」では有害廃棄物に指定され、各国間の越境移動が禁止されています。

【一酸化炭素規制】

排出ガス中に含まれる一酸化炭素の容量比率による濃度を規制する方式です。

【一般環境大気測定局】

市内の大気汚染の状況を調べるために大気汚染常時監視測定局を設置しています。この測定局のうち、一般生活環境を測定するものを一般環境大気測定局といいます。

【一般廃棄物処理基本計画】

昭和45年に制定された「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」の主旨を遵守し、本市における一般廃棄物のうち、ごみ処理に関しての長期的な対応を計画的に定めたものです。その後、「ごみ処理編」に続き平成11年3月には、計画的な生活排水処理を実施するため、長期的な視点に立脚した計画処理区域内の処理方法、基本方針、生活排水施設(汚泥再生処理センター)の整備、収集・運搬の効率化、最終処分等、資源循環型社会の実現に向けて具体的な施策を総合的に検討した「生活排水処理編」が策定されています。

【エコドライブ】

地球高温化の要因のひとつである二酸化炭素(CO₂)や、大気汚染の原因のひとつである自動車の排気ガスを減らすため、環境に配慮して自動車を運転すること。具体的には、アイドリングストップや一定速度での走行を心掛け、急発進・急停止をしないこと等があげられます。

【オゾン層】

高度約25km(成層圏)を中心にオゾンが高濃度に分布しているところをオゾン層と呼び、この層が太陽からの有害な紫外線を吸収し、地球上の生物を守る働きをしています。大気中に放出されたフロンなどの物質は、成層圏まで達し、紫外線の作用により分解され塩素を放出し、これがオゾン層を破壊します。この影響で有害紫外線が増大し、皮膚がんや白内障などの健康障害や動植物への影響が懸念されています。

【温室効果ガス】

太陽から流れ込む日射エネルギーを吸収して加熱された地表面は赤外線の熱放射をしますが、大気中には赤外線を吸収する気体があり、地球の温度バランスを保っています。これらの気体を温室効果ガスと呼び、代表的なものとして二酸化炭素、メタン等が挙げられます。近年、大気中の二酸化炭素など温室効果ガスの大気中濃度が増加し、これに伴って太陽からの日射や地表面から放射する熱の一部が温室効果ガスに吸収されることにより地表面の温度が上昇する現象が生じており、これを地球高温化といいます。

《か行》

【海洋汚染】

海の生物や人間の健康、漁業などの営みに有害なものを人間が、直接、または間接的に海に持ち込むことをいいます。

【化石燃料】

石油、石炭、天然ガス等の地中に埋蔵されている燃料の総称です。数百万年以上前の植物やプランクトンなどが地中に埋もれて、高温や高圧の影響を受けて生成されたものといわれています。

【川口市環境基本条例】

川口市で生活する人々がいつまでも健康で文化的な生活が送れるよう、市・事業者・市民が一体となって環境の保全と創造に協力し、今ある環境を守り育てていくことを目的として、平成11年4月に施行された条例です。この条例の中で、施策を計画的・総合的に推進するための環境基本計画を策定することが定められています。

【川口市総合計画】

総合計画はおよそ10年を期間とし、福祉や教育・環境問題など、あらゆる行政分野を網羅して「まちづくり」の基本方針を定める、市の最上位の計画となるものです。

第3次川口市総合計画は、平成12年から目標年次である平成22年の川口市の姿(将来都市像)を「緑 うるおい 人 生き生き 新産業文化都市 川口」と定め、総合的で計画的な都市づくりの指針として策定された計画です。

第4次川口市総合計画は、平成22年から平成34年の12年間について策定されています。

【感覚公害】

人の感覚を刺激して、不快感を与える公害を、感覚公害と総称します。具体的には、騒音、振動、悪臭などがあります。

【環境基準】

「環境基本法」で、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染及び騒音に係る環境上の条件について、それぞれ人の健康の保護及び生活環境の保全に関し維持されることが望ましい基準であると定められています。

【環境基本計画(国)】

21世紀初頭までに進めていく環境行政全体の道すじを長期的・総合的に明らかにした計画で、平成6年12月に「第一次」、平成12年12月に「第二次」、平成18年4月に「第三次」、平成24年4月に「第四次」が、閣議決定されました。

【環境基本法】

平成5年11月に施行された法律で、近年の環境問題に対処するため、環境の保全についての基本理念として「環境の恵沢の享受と継承等」、「環境への負荷の少ない持続的発展が可能な社会の構築等」、「国際的協調による地球環境保全の積極的推進」の三つの理念を定め、国、地方公共団体、事業者及び国民の環境保全に係る責務を明らかにしています。

【環境共生都市】

「環境負荷の軽減」、「環境との調和」及び「自然環境の活用」を基本方針として、人間の利便性・快適性との調和を目指す都市づくりのことをいいます。

【環境マネジメントシステム】

環境マネジメントシステムとは、廃棄物量の削減やエネルギー消費量を削減するなど、環境に与える負荷をできるだけ削減するための計画を立て、その計画を実施し、さらにその実施結果をチェックし、その結果を基に方針・手続き等を見直し、継続的な改善を図ることをいいます。

本市においても、環境への配慮の姿勢を市の内外に示すため、国際標準規格である「ISO14001」に基づく環境マネジメントシステムを構築し、平成11年10月から運用し、その後、審査登録機関の審査・判定を受け、平成12年2月23日に新規登録(ISO14001認証取得)しています。

【キシレン】

無色透明の液体で、揮発性、引火性がある物質です。他の化学物質の原料として使われているほか、油性塗料や接着剤などの溶剤としても使われています。また、灯油、軽油、ガソリンなどにも含まれています。

【揮発性有機化合物（VOC）】

常温常圧で容易に揮発する有機化合物の総称で、主に人工合成されたものを指します。英語表記（Volatile Organic Compounds）の頭文字をとってVOCと略され、比重は水よりも重く、粘性が低くて難分解性であることが多いため、地層粒子の間に浸透して土壌・地下水を汚染します。一方、大気中に放出され、光化学反応によってオキシダントや浮遊粒子状物質の発生に関与していると考えられています。

【九都県市】

埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、千葉市、さいたま市、相模原市のことです。首都圏で共通する環境問題などに、協力して取り組んでいます。

【公共用水域】

「水質汚濁防止法」で定義されている用語であり、河川、湖沼、港湾、沿岸海域その他公共の用に供される水域及びこれに接続する溝渠、灌漑、用水路その他公共の用に供される水路をいいます。なお、「下水道法」に規定する公共下水道及び流域下水道であって終末処理場を設置しているものは除外されています。

《さ行》

【埼玉県生活環境保全条例】

生活環境の保全に関し、県、事業者及び県民の責務を明らかにするとともに、環境への負荷の低減を図るための措置及び公害の発生源についての規制を定めることにより、生活環境の保全に関する施策を総合的に推進し、現在及び将来の県民の健康の保護及び安全かつ快適な生活の確保に寄与することを目的とした条例です。

【ジクロロメタン】

塩素を含む有機化合物で、不燃性でものをよく溶かす性質があるため、金属部品などの加工段階で用いた油の除去に使われるほか、塗装剥離材などとして使用されている物質です。

人体への影響としては、吐き気、だるさ、めまい、しびれなどが報告されています。

【自動車から排出される窒素酸化物及び粒子状物質の特定地域における総量の削減等に関する特別措置法（自動車NOx・PM法）】

「自動車NOx・PM法」は、初めはディーゼル自動車からの窒素酸化物（NOx）を抑制することを目的に、平成4年に関東及び関西圏の市区町村を対象に制定された「自動車NOx法」という法律でした。しかし、多くの地域で二酸化窒素の環境基準を達成していないことや粒子状物質（PM）が健康に悪影響を及ぼしているという問題（名古屋南部大気汚染公害訴訟）などを受けて平成13年6月に、新たに粒子状物質の抑制も含め「自動車NOx・PM法」が制定され、対象地域も、中部圏が追加されています。

【自動車排出ガス測定局】

市内の大気汚染の状況を調べるために大気測定局を設置しています。この測定局のうち、主要道路の自動車の排出ガスの影響を調べるため、道路周辺の環境を測定するものを自動車排出ガス測定局といいます。

【地盤沈下】

地中に存在する地下水を過剰に汲み上げることによって、地下の水位が下がり、これによって地表面が下がる現象です。地盤沈下が発生すると住宅が傾き、地下に埋められている水道管やガス管が寸断されるなどの被害が発生します。地盤沈下は一旦発生してしまうと復元が非常に困難なため、未然防止が重要です。

【臭気指数】

臭気のある気体を、無臭の空気希釈し、臭いが感じられなくなった希釈倍数を臭気濃度といいます。また、このときの希釈倍数の常用対数を10倍した値を臭気指数といいます。

臭気指数規制は、人間の嗅覚を用いた測定により算出される臭気指数を指標とし、複合臭や未規制物質に対応することを目的としています。

【重金属類】

軽金属に対する語であり、水銀、カドミウム、鉛、六価クロム、ヒ素など比重4以上の金属の総称です。重金属類は一般に体内に蓄積する傾向にあり、程度の差はありますが有害なものが多くみられます。

【硝酸性(態)窒素及び亜硝酸性(態)窒素】

主として窒素肥料の酸化によって生じ、水の汚染を推定する指標の一つとされています。平成4年12月に改正された「水道の水質基準」では、硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素を「健康に関連する項目」の一つと位置づけており、公共用水域並びに地下水の環境基準でも平成11年2月の改正により「10mg/L以下」と定められています。

【常時監視】

環境の実態、経年変化等を把握し、対策の効果を確認するための測定を常時監視といいます。現在、「大気汚染防止法」、「水質汚濁防止法」、「ダイオキシン類対策特別措置法」、「騒音規制法」において義務付けられています。

【振動】

「振動規制法」では人の活動で発生し、周辺の生活環境を損なうおそれのあるものとして工場・事業場や建設作業、道路交通の振動に規制等を定めています。

【水域類型】

公共用水域の水質汚濁に係る環境基準は、人の健康の保護及び生活環境の保全に関し定められており、前者は一律の基準、後者は立地・利水等の状況により類別し、公共用水域ごとの異なる基準が指定されています。この分類を水域類型といい、河川については、AA, A, B, C, D, Eまでの6分類となっています。

【水質汚濁】

事業活動その他の人の活動に伴って発生し、河川、湖沼、海域などの水域の水質を悪化させ、人の健康や生活環境に係る被害を及ぼすことをいいます。

【水質汚濁防止法】

昭和45年12月に制定された法律で、工場及び事業場から公共用水域に排出される水の排出及び地下水に浸透する水を規制し、生活排水対策の実施を推進すること等によって、公共用水域及び地下水の水質の汚濁防止を図ることを目的としています。

【生活排水】

日常生活に伴って台所、洗濯、風呂等から排出される水です。

生活排水の中でし尿を除いたものを生活雑排水といいます。排水中の窒素やリンによる富栄養化など、今日の水質汚濁の原因は生活排水が多くを占めています。そこで、下水道整備や生活雑排水も処理する合併処理浄化槽の普及が望まれています。

また、日常生活の中で、食品や油をそのまま排水口に流さない、洗濯はできるだけまとめて行い洗剤を適切に使用する、といった配慮が必要です。

【騒音】

一般に不快な音をいいます。「騒音規制法」では人の活動で発生し、周辺の生活環境を損なうおそれのあるものとして工場・事業場や建設作業、道路交通の騒音に規制等を定めています。

《た行》

【ダイオキシン類】

ポリ塩化ジベンゾ-パラ-ジオキシン、ポリ塩化ジベンゾフランおよびコプラナーポリ塩化ビフェニルの総称であり、廃棄物の焼却や塩素系農薬の製造過程等で発生します。人体への影響として、発がん性や催奇性が確認されており、環境ホルモンの一つとしても問題となっています。

【ダイオキシン類対策特別措置法】

ダイオキシン類による環境の汚染の防止及びその除去等をするため、ダイオキシン類に関する施策の基本となる基準及び必要な規制、汚染土壌に係る措置等を定め、国民の健康の保護を図ることを目的として平成12年1月に施行された法律です。

【大気汚染】

人間の生産活動・消費活動によって大気が汚染され、人の健康や生活環境・生態系に悪影響が生ずることであり、代表的な汚染物質としては、浮遊粒子状物質、一酸化炭素、二酸化硫黄、二酸化窒素、光化学スモッグの原因となる光化学オキシダントなどが挙げられます。

【大気汚染防止法】

昭和43年6月に制定された法律で、工場及び事業場における事業活動に伴うばい煙、揮発性有機化合物及び粉じんの排出、並びに建築物等の解体等に伴う特定粉じんの排出等を規制し、有害大気汚染物質対策の実施を推進し、自動車排出ガスに係る許容限度を定めています。大気の汚染に関し、国民の健康を保護するとともに生活環境を保全し、大気の汚染に起因する健康被害が生じた場合、事業者の損害賠償の責任について定め、被害者の保護を図ることを目的としています。

【炭化水素】

炭素と水素からなる有機化合物の総称です。自動車排ガス等に不完全燃焼物として含まれています。メタン以外の炭化水素（非メタン炭化水素）は窒素酸化物とともに光化学オキシダントの原因物質の一つといわれています。

【地球高温化（地球温暖化）】

大気中の二酸化炭素などの温室効果ガスの増加により、地球の気温が上がることをいいます。このような気温の上昇に伴う地球環境の影響としては、海面水位の上昇に伴う陸地の減少、豪雨や干ばつなどの異常現象の増加、生態系への影響や砂漠化の進行、農業生産や水資源への影響などが挙げられており、私たちの生活に甚大な被害が及ぶことが指摘されています。

本市では、平成21年度から職員はもとより市民、事業者の皆さんに地球規模の危機感を認識していただくため、過ごし易いイメージがある「温暖化」から「高温化」へ変更し使用しています。

【窒素酸化物】

本来、窒素と酸素からなる化合物の総称ですが、大気汚染物質としては一酸化窒素と二酸化窒素の総和量を意味し、NO_xと略称します。物の燃焼の過程では、主に一酸化窒素として排出されますが、これが徐々に大気中の酸素と結びついて二酸化窒素になります。環境基準が定められている二酸化窒素は、刺激性があり、また、酸性雨や光化学オキシダントの原因物質の一つといわれています。

【TEQ（毒性等量）】

Toxicity Equivalency Quantityの略です。種類によって異なるダイオキシン類の毒性の強さを表す単位です。ダイオキシン類の中で最も毒性の高い2,3,7,8-TCDDの毒性を1とする換算係数（TEF）を用いて、他のダイオキシン類の毒性の強さを換算し、数値の後ろにTEQをつけて表します。

【テトラクロロエチレン】

主にドライクリーニングの溶剤や金属の洗浄などに使われてきた有機塩素系溶剤ですが、今日では代替フロン原料としての用途が多い物質です。

慢性毒性としては、肝臓や腎臓への障害があり、低濃度では頭痛、めまい、眠気などの神経系への影響が報告されています。

【都市計画基本方針】

平成4年の都市計画法改正により創設された、「市町村の都市計画に関する基本的な方針」として、本市の都市づくりの望ましい方向性について広く市民の意見を聴取し、平成9年5月に策定・公表しました。この基本方針は市民の意見を反映しながら都市づくりのビジョンを明らかにし、それを基本として総合的な都市行政を進めるためのものであり、今後の本市の都市づくり行政はこの基本方針に従って運用されます。

【土壌汚染】

化学物質や重金属が自然の浄化能力を超えて過剰に土壌へ入り、土壌や地下水を汚染することをいいます。土壌汚染は、人間や動物の健康を害し、植物を枯らすなど、環境に悪影響を及ぼすものです。

【トリクロロエチレン】

主に機械部品や電子部品などの加工段階で用いた油の除去などに使用されてきた有機塩素系溶剤ですが、今日では代替フロン原料としての用途が多い物質です。

慢性毒性としては、肝臓や腎臓への障害があり、低濃度では頭痛、めまい、眠気などの神経系への影響が報告されています。

【トルエン】

水に溶けにくく、油などを溶かす性質があります。同じような性質があるベンゼンに比べて毒性が低く、安価なことから、油性塗料や接着剤などの溶剤として使われています。また、さまざまな化学物質の原料としても使われており、全国で最も排出量の多い化学物質となっています。

《は行》

【ばい煙】

燃料その他の物の燃焼に伴い発生する硫酸化物、ばいじん、カドミウム・鉛等の人の健康又は、生活環境に係る被害を生ずるおそれのある物質をいいます。

【廃棄物】

廃棄物とは、ごみ、粗大ごみなどの不要になった物で家庭から出る一般廃棄物と工場等から出る産業廃棄物に大別されます。

【BOD（生物化学的酸素要求量）】

Biochemical Oxygen Demandの略です。

河川水などの有機物による汚濁の程度を示す指標で、水中の微生物が有機物を分解するときに消費する酸素量のことであり、数値が大きいほど有機物の量が多く、水が汚れていることを示します。

【BOD75%水質値】

BOD75%水質値とはn個の日間平均値を水質の良いものから並べたとき、 $0.75 \times n$ 番目に来る数値のことをいいます。BODにおける環境基準の達成状況は、河川が通常の状態（低水流量以上の流量が流れている状態）にあるときの測定値によって判断することとなっています。しかし、河川の流量が少ない時の水質の把握は非常に困難であるため、BODについては測定された年度のデータのうち、75%以上のデータが基準値を達成することをもって評価しています。例えば、月一回の測定の場合、日平均値を水質の良いものから12個並べたとき、水質の良い方から9番目が75%値となります。

【PCB】

ポリ塩化ビフェニルの略語です。化学的に安定しており、熱安定性にもすぐれた物質でその使用範囲は、絶縁油、潤滑油、ノーカーボン紙、インク等多数あります。しかし毒性が強いことから大きな社会問題となり、昭和47年12月に製造が中止されました。

【ppm】

Parts per millionの略です。100万分の1を表す単位で、濃度や含有率を示す容量比、重量比のことをいいます（ $1 \text{ ppm} = 100 \text{ 万分の} 1 = 0.0001\%$ 、 $1 \text{ ppb} = 10 \text{ 億分の} 1 = 0.001 \text{ ppm}$ ）。 1 m^3 の大気中に 1 cm^3 の汚染物質が含まれているとき1ppmと表示します。

【ppmC】

大気中の炭化水素類の濃度を表す単位で、1ppmCとは、空気 1 m^3 中にメタンに換算された物質が 1 cm^3 含まれている場合をいいます。

たとえば、ベンゼン1ppmをメタン換算すると、ベンゼンの炭素原子数の6から6ppmCとなります。

【微小粒子状物質（PM2.5）】

大気中に浮遊している粒径 $2.5 \mu\text{m}$ （ $1 \mu\text{m}$ は1mmの1000分の1）以下の小さな粒子のことで、従来から環境基準を定めて対策を進めてきた浮遊粒子状物質（SPM：粒径 $10 \mu\text{m}$ 以下の粒子）よりも小さな粒子です。

PM2.5は非常に小さいため（髪の毛の太さの30分の1程度）、肺の奥深くまで入りやすく、呼吸系への影響も加え、循環器系への影響が心配されています。

【粉じん】

物の破碎、選別その他の機械的処理又はたじ積に伴い発生し、又は飛散する物質をいいます。「大気汚染防止法」では、「特定粉じん」とは、粉じんのうち、石綿その他の人の健康に係る被害を生ずるおそれがある物質として政令で定めるものをいい、「一般粉じん」とは、特定粉じん以外の粉じんをいいます。

【ベンゼン】

常温で無色の液体で揮発性や引火性が高く、また発がん性があるので、取り扱いには注意が必要な物質です。

毒性としては、人に白血病を引き起こすことに関して十分な証拠があると考えられており、慢性毒性としては、高濃度において造血器に障害を引き起こすことが報告されています。

《ま行》

【マンガン及びその化合物】

マンガンは、地球上には比較的豊富に存在しており、合金の原料や鉄鋼製品を製造するときの添加物などとして使われます。また、マンガンの化合物は、乾電池や酸化剤に使われる二酸化マンガン、飲料水の処理などに使われる過マンガン酸カリウムなどがあります。

【緑の基本計画】

都市の緑に関する計画として、平成6年6月の都市緑地保全法の改正に伴い、緑地の保全及び緑化の推進に係る諸施策を総合的、計画的に推進していくことを目的とする計画をいいます。本市においては、平成9年5月に「川口市緑の基本計画」を公表したところです。

【面的評価】

道路交通騒音の評価方法です。幹線道路に面する地域において、評価道路から50mの範囲にあるすべての住居等を対象に、実測値や推計によって騒音レベルの状況を把握し、環境基準に適合している戸数とその割合を算出し、評価します。

《ら行》

【ライフスタイル】

人間が日常の生活や活動を行うときの様式（生活様式）のことであり、ここでは主に資源やエネルギーの消費、ごみの廃棄などに関するものをいいます。近年の環境問題は、日常生活におけるガスや電気、石油や木材などの資源・エネルギーの大量消費やごみの大量廃棄による部分、すなわちライフスタイルのあり方による部分が大きくなってきています。環境の保全のためには、日常生活において、より一層の省資源・省エネルギーを進めるなど、ライフスタイルを環境に配慮したものへと見直すことが重要といわれています。

環境保全行政の概要

平成26年版

川口市環境部

環境保全課

埼玉県川口市朝日4丁目21番33号

電話 048(228)5389

FAX 048(228)5311

